
彼女のパンツはかく語りき

白鳥準

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女のパンツはかく語りき

【Nコード】

N9817P

【作者名】

白鳥準

【あらすじ】

龍泉学園高等部一等生——君島幸一《読み：コクハラ》はぱんつを愛する男だった。入学式の日、学園屈指の優等生であり『永結凍土の女豹』という物々しい二つ名を持つ竜胆あかりと衝撃的（君島談）な出会いを果たしていた。龍泉学園の重要行事である「審判員選挙」を巡り、学園のアイドル神山樹、何故か目を閉じて生活する生徒会長、そして唯一無二の親友であり敵である大山翔悟と過ごす波乱の日々を過ごす——。彼の持つぱんつ愛とぱんつ理論によって、悩める乙女たちを救っていく。変態と乙女の繰り広げるカオス持論

系ラブコメディ、ここに開幕。 改稿等を何度も重ねる予定なので、暫定上げです。更新ペースはゴミ並み。

ブローグ

白。

龍泉学園高等部の地に足を踏み入れてから、初めて見た色は白だった。

当然、僕ら新入生を歓迎するように彩られた桃色の桜並木、まだ創立して間もない薄いグレーの校舎、受付の学生が着ている紺色の制服も目に留まったが、僕が見た色はそれでも白だった。

純白とは穢れ無き童心、美しき乙女の象徴。青春の香りが導いたその色は、現代の穢れきつた心の持ち主たちでは到底扱いきれない神々の産物。白とは最もポピュラーな色としても浸透している。着飾らないこと、基本形こそが最強であるという思想から白を選択するものは多い。僕はそれを否定はしない。

だが、本当に白を選択しているのか？ 白という無難な色に逃避し、白という色に踊らされているだけではないだろうか？

僕は、最近の女学生たちに問いかけたい。

君の選択した色は、本当に白なのかと。

靴下の色は選ぶのに、ケータイの色も選ぶのに、ぱんつの色は白でいいのかと！

白がまるでベーシックカラーのように、ランドセルの色はとりあえず赤で良いやとでも言うように、彼女らの多くが白いぱんつをはいている。折角桃色の風が女の子の股の下を滑走しようとも、そこで見ることが出来たものがどうにもしつくり来なければ落胆するのが男というものだろう。ぱんつならなんでもいいとかいう輩は帰れお前にぱんつを見る資格はない。

とにかく、白という色は高等部女学生という立場になってから、凶悪なまでに難易度を要する色なのだ。これを履きこなすというのは、至難の業を極めるだろう。白をわざわざ選択すること。それがいかに難しいかを僕は理解しているつもりだ。

そう、思っていた僕の前に、その白は現れたのだ。

竜胆あかり先輩。

腰まで伸びた黒髪を靡かせ、きらりと黒縁めがねを光らせ、新入生が校門にやってくるのを、敵を待ち構えていたかのような威圧感で迎える。皺一つ無い制服をきっちり着込み、スカートを小さく風に揺らしている。学園一の「感じの悪い女の子」として名を馳せることになる、龍泉学園屈指の優等生。

僕は竜胆先輩を見た瞬間、電撃が走ったかのような強い痺れを感じた。手足の指先がじんじんと僕に何かを訴えかけるかのように、心臓の鼓動と同じペースでもどかしい痛みを送ってくる。僕の中に眠る野性的な本能が、彼女には近づくなど、否、あえて戦いに行けと告げている。僕は知らぬ間に、彼女のスカートから目が離せなくなつた。

彼女のぱんつが見たい。

想像が出来なかつた。いつもなら瞬時に女の子のベストぱんつを見極められる僕だが、その時の竜胆先輩のぱんつは想像出来なかつた。ハイニーソックスに黒もありえただろう。薄い寒色系もありえた。流石にハイレグ系は無いだろうと思つたが、その考えも否定に容易かつた。もはやあらゆるぱんつの可能性が、僕の脳内を太陽系を回る惑星のようにぐるぐると回っていた。

一体、どんなぱんつをはいているんだ……。

その一心で、僕は他の生徒の邪魔になることも厭わず、ただスカートを捲れ上がる瞬間を待った。その時間は石の上で百年の時を待つ男を思い出させるほどだったように思う。

ふっ、と頬に風を感じた。細い指で輪郭をなぞられているかのような感触。風が言っている。さあ、前を見なさい、あなたの望むものを見せてあげましょう、と。

青き風が地を走って行くのが分かった。やがて風は彼女の足元へたどり着き、その魅力的なふとももに螺旋を巻くようにして駆け上がる。風とは着の身着のままに生きるもの。自らの目的も無く、た

だ自分の欲求に合わせて走り回る旅人。決して彼らを迷惑な自由人などと称してはならない。僕は、風が無ければんつの一枚さえ見ることが叶わないのだから。

風は竜胆先輩のスカートに直撃すると、無残にもその姿を散らせて行った。

「きゃあっ」

急いでスカートを上から押さえようとするが、遅い。むしろ、スカートとは押さえれば押さえようとするほど捲くれ上がるもの。片手では、どうにも出来ない。

僕は小さく身を屈め、その中身を垣間見た。

「なっ、なにい!？」

思わず叫んでしまった。

春の陽光を瑞々しく反射させる白。レース柄も何も無い、完全無地の白ぱんつ。ぴっちりとした肌に吸い付くようなサイズの選択ではなく、ほんの少しゆとりを持たせたことが伺える絶妙な皺加減が見える。お尻の形が完全に浮き彫りにならない、自然にそこにあるかのようなぱんつ。ほんのりと温かみさえ感じるそれは、衛生的にも完璧なぱんつ。洗ってから間もないぱんつは、太陽の香りさえするだろう。

あれは、何だ……!

まるで宇宙に星が誕生した瞬間を見たかのような衝撃。

僕は震えていた。歯を食いしばり、それを必死に抑えていた。

「し、静まれええ!」

脚が、腕が、そのぱんつへと僕を誘おうとしている。

そう、僕は思ってしまったのだ。あのぱんつに触れてみたいと。決して足を踏み入れてはならない禁断の場所へと、行きたいと願ってしまった。

だがダメだ。

あのぱんつに触れていいのは、彼女自身がそれを許したものだ。だ。

女の子のぱんつに触れること。それは不可能なことではない。しかし、彼女たちの想いを無碍にしてまでたどり着いて良い場所じゃない。女の子無くしてぱんつ無し。彼女たちの選択こそがその奇跡を生み、僕らを感動させる。

「くうっ、なんて、なんて素晴らしい……！」

あまりにも僕が挙動不審な行動を取っていたのか、意地悪な風から開放された先輩が僕のほうへ歩み寄ってきた。

「ど、どうしたの君。新人生よね？ 何かあった？」

近くで見ると、僕よりも少しだけ身長が低かった。上目遣いで覗き込むように彼女は言った。

僕はついに、涙を流してしまった。鼻血も流している気がするが、気のせいにしておこう。

罪悪感だ。ぱんつを見る側はいつもこんな幸せなのに、ぱんつを見られる側はいつだってそのことに気づいていない。彼女に、少しでもこの幸せを分けてあげられたら、なんて出来もしないことを夢想してしまう。

僕はそこで、初めて彼女の苗字を知った。制服の胸元についた六つのバッチ。その横にピンで留められた名札には、『竜胆』と書いてあった。僕は、この名前を一生忘れないとその時に誓ったのだ。

「ねえ、本当に大丈夫？ 調子悪いなら保健室に案内するけど……」

「大丈夫です。調子は悪いどころか絶好調です」

「そ、そう？ あ、鼻血……」

「戦場で負った傷は勲章です。僕は、他の紳士たちのためにもここで血を流さなければならいんです。ですから、気にしないで下さい」

「良く分からないけど、痛々しいからティッシュ使いなさい」

「ありがとうございます」

素直にポケットティッシュを受け取って、丸めて鼻に詰めた。

「入学式そろそろ始まるから急ぎなさい。体育館の場所は分かる？」

「はい、大丈夫です」

「そう、じゃあ行つてらっしゃい」

先輩は綺麗な笑顔を浮かべて、僕の背中を叩いた。なんて温かい歓迎だろう、思わず良い意味でも涙しそうだった。でも、ちよつと待つて欲しい。僕はあなたに伝えたい事があるんです。

「先輩、ティッシュありがとうございました」

「良いのよ。さ、早く行つて」

「それと……」

僕は右手の親指を立て、持てる限り最大の笑顔を見せつけ、左足を一步後ろに下げた。

「最高の、ぱんつでした！」

最大速力で逃げ——げふう！

逃走を図ろうと後ろを向いた瞬間、僕の首を目掛けて長い腕が伸びてきた。それは確実に僕の襟を捕らえ、女の子のものとは到底思えない力で引き戻された。蟻地獄に捕らわれた蟻のようにもがいたが、無常にも捕食者は僕を完全に捕らえ、ドスの利いた声で囁くように言った。

「ごめんなさい突然引き止めてしまつて。良く聞こえなかつたんだけど、今、君、なんて言つたの」

日本語学的には疑問文の語尾は上げて読むものなんですよ、先輩？

「パンツって、言わなかつた？ ねえ、言つたよね？」

「バリバリ聞こえてるじゃないですか！」

「言つたのね？ ふうん、じゃあもう一つ質問するけど、何が最高のパンツなの？」

一語一句漏らさず聞き取られてました。

「いえ、あ、その、この校舎つてなんかぱんつの形に似てませんか？ なんか三角っぽいし」

「そうね。それで、何が最高のパンツなの？」

聞いてらっしゃらない。心持、襟に加わっている握力が時間を経ることに増している気がする。首が次第に絞まっていき、氣道が確保できない。息が。

「正直に言つて。私のを、見たのね？」

「ぐぐぐ、苦しいです先輩……」

「答えなさい。さもないとこのまま絞め殺すわよ」

あれ、さっきまで優しくかった先輩が鬼神のように見えるのは何故だろう。

「み、みました」

「色は」

「白です。無地の白色で、恐らく近くのスーパーで売っている上下セット1,050円のものかと思います」

「——っ！」

「ぐへえっ！」

身体がぐいつと浮き上がった。

チョークスリーパー！ 入ってる！ 入ってる！ うわぁ、胸とかも当たってなんかどうしたいのか分からない！ どちらにせよ何か気持ちいいかもしれない。

「君島くんというのね。君島くん、今すぐ私に関する記憶を全て消しなさい」

「なんか悲しい別れのシーンみたいなこと言わないで下さい！ それに、恥ずかしがることはありません、あれは完璧なぱんつでした！」

「変なこと大声で叫ばないで頂戴。本当に締めるわよ」

「うぐぐぐ……しかし、僕はことぱんつに関しては自分に嘘をつきたくないっ。先輩のぱんつが最高だったということを忘れたくは無いつ！」

「くっ、変態だったのね君は。優しくしてあげた私が馬鹿みたいじゃない」

「馬鹿じゃありません！ 先輩は最高です！」

「なっ、何を……」

首を絞める腕がほんの少しだけ弱まる。これならなんとか抜け出せるかもしれない。少しだけ名残惜しいが。

「僕は感動したんです。先輩と、先輩のぱんつが奏でるものに。言うなれば最高の指揮者と最高の演奏者が一心同体となって音楽を奏でるようなもの。これを涙せずにはいられません。滅多に味わうこととできない究極の調和、それが先輩にはありました」

するりと腕から抜け出すことに成功する。赤くなつた首をさすりながら先輩へと振り返ると、顔を真っ赤にして口をパクパクさせている、なんだか面白い姿の先輩がいた。

「これはそう、まさに恋とも呼べましょう」

「ここここ、恋!？」

「そうです。一億六千万という日本、いえ、六十億強という人の数の中で見つけ出した、たった一つの出会い！これを恋や愛と呼ばずしてなんと呼びましょう！」

思ってもいないことがポロポロ出てくる。僕の悪い癖だつた。ぱんつに対して高説を垂れる時、どうにもやたらと誇張してしまう節がある。直さなきやいけないと思っているのだが、まあぱんつに関しては嘘を言っているわけではないので諦めている。

「う、うああああ！」

突然、発狂したような声を上げると、先輩は僕の両こめかみをがっちり掴む形で顔面を握りこんできた。所謂、アイアンクローという奴だ。というか、痛いっ！

「な、何なのよ君はっ！分かつたわ、誰かに嫌がらせを頼まれたんでしよう。罰ゲームでブスな女の子にラブレター送るような悪質な嫌がらせなんでしょう！」

頭蓋骨を破壊せんとする勢いで力が込められていく。次第に僕の身体は桜散るアスファルトから離れていき、完全に持ち上がった。

「誰よ、誰に頼まれたの。樹？^{いつき}あの子に頼まれたの？」

「い、樹って誰ですか？僕は正直に自分の気持ちを口に出しただけですよ！」

「それはそれで恥ずかしいから嫌あああ！」

ふわっ、と僕の身体が浮き上がった。これはそう、アイアンクロー

ー・スラム。相手の顔面を手のひら全体で掴んだまま持ち上げ、地面に叩きつける技。いや、死ぬよ僕。普通に。

「落ち着いてください先輩！ここはリングじゃありません、僕死んじゃいます！」

「君を殺して私は逃げる！」

「至極まともな意見だ！」

反転、青空。

僕の視界は綺麗な桜並木を通り過ぎ、雲ひとつ無い青空をいつぱいに捉えた。そう、白いぱんつとはまるで青空のようだ。どこか見るものを澄んだ気持ちにさせる。生まれたばかりの赤ん坊に抱く、母性的な優しさとも言える。空には鳥が飛んでいた。彼らが自由に大空を羽ばたけるように、僕の性癖も享受されないだろうか。

この世界は美しいが故に生きにくい。僕は女の子がはくぱんつを軽々と見ることは出来ないし、そんなことしようものなら社会的な抹殺、場合によっては身体の拘束までされてしまうのだ。時には女の子から「きもーい」「死ね」と罵られ、同士からは勇者だと賛美を受けても彼らは僕を庇おうとはしない。結局、同士もぱんつより自分が大切なのだ。それはある意味では正しい生き方に思える。でも、僕は自分に嘘をつきたくない。最高のぱんつと、それをはきこなす最高の女の子さえ見つければそれでいい。そのためならば、どんな罵声も受けよう。僕はこの世界で、ぱんつという女神を探しているのだ。罰を受ける事すら厭わない。

龍泉学園高等部、中等部と比べ格段に短くなったスカート。神は僕に女神を探すチャンスを与えた。この学園でしか達成しえぬ僕の望み。それを叶えるための生活がこれから始まる。

学園のすべての女学生。彼女たちのぱんつを僕がプロデュースすること。僕が望んだぱんつをはいた女の子しかいない、究極のユー・トピアを作ること。

それが、僕こと君島幸一の望みだった。

1話

「ひいひいひい！」

猛烈な寒気がして顔を上げると、ちょうど四時間目の授業が終わったところだった。弁当箱を持ったクラスメートたちが、僕を汚物でも見るように遠目で見ていた。

「す、すいません……」

素直に謝る。制服の袖を捲り上げると、気持ち悪いくらい鳥肌が立っていた。なんだろう、悪夢でも見たのだろうか。額を拭くと、汗が浮いていた。夢の中で窒息すると、目が覚めたとき何故か息切れを起こしているが、今まさにそんな感じた。夢の中で死んだのだろうか。良く覚えていない。

「どうしたコクハラ。お気に入りのパンツを目の前で破かれる夢でも見たか？」

後ろから僕の肩をつついてきたのは、おおやまじょう大山翔悟くんだった。ただのイケメン。ほかに説明はいらない。

「……僕はコクハラじゃない、君島だ」

「どっちでもいいじゃねえか。同じようなもんだ」

「文字数しか合っていないよ！」

「じゃあなんて呼べばいいんだよ」

「普通に君島って呼べばいいじゃないか！ どうしてそこで悩むの！」

「きみしむあつ！ ……ほら、噛んだじゃねーか」

「わざとらしい！」

この教室で席が割り当てられた時、たまたま後ろの席になった翔悟くんは、僕のことを「コクハラ」と呼んだ。てっきり人間違いかと思ったがそういうわけではなかった。

コクハラ。黒原とは書かない。

僕が入学式に起こしたあの出来事は、かなり多くの生徒に見られ

ていたらしく、その様を見ていた一人の生徒が「告白ハラスメントだ……」と呟いたらしい。それがきっかけで、僕はこのクラスでおよそ大半のクラスメートから告白ハラスメントを略して「コクハラ」という不名誉なあだ名で呼ばれるようになってしまったのだ。自分の名前と全く無関係なところから付けられたあだ名なので非常にややこしい。一年くらい経つと「君島」って呼ばれるほうが新鮮になりそうで怖い。

「で、どんな不愉快な夢を見てたんだよ。まさか……ノーパン少女か？」

「そんな嬉々とした顔で聞かないでよ」

身乗り出して折角のイケメンが百八十度転換してしまうようなにやけ顔を寄せてきた。翔悟くんは黙っていれば普通に格好良い人なのだけど、喋りだすとただの変態だった。僕とはそういう関係で話す機会が多い。

「お前があんな悲鳴を上げるくらいだ。きっと事件はパンツじゃねえ。そもそもそれすら無かったと考えるのが妥当だ。絶対領域を破ってしまったお前に待ち受けていたのは女の肉体というリアル。残酷だが、羨ましいぜコクハラ」

「絶対領域を破るという前提で話してくれるところ、本当に君は僕のことを分かってくれているのだと思うんだけど、そんな夢は見ないよ。ていうかホントに悪夢だねそれっ！」

「俺はそっちのほうが良いけどな」

「やはり君とは相容れないんだね……悲しいよ」

「戦友としてはこれほどまでに震える相手はいないがな」

正直に言っつて、僕は彼という人間が好きだ。他人の目を恐れずに自分の欲望へと突き進むその様は、まだ僕にさえ到達出来ない地点だ。尊敬に値する。しかし、どうしても彼とは相容れない部分がある。

ぱんつの有無。

彼がイケメンゆえの運命なのかもしれない。彼はぱんつをファッ

シヨンの一種とも思っていない。彼に言わせればぱんつはただの布。強いて言うなら脱がす楽しみがある程度だと彼は語る。

ぱんつを脱がす。想像しただけでも吐きそうな言葉だった。ぱんつ無き乙女に純情は無く、純情無き乙女には魅力を感じない。それをどれだけ力説しようと、彼は一向に折れなかった。僕は学園で初めて出来た友人がダークサイドにいることにただただ深い悲しみを覚えながら、しかしなお立ち向かってくる彼に、僕は敵ながら感心していた。

戦友と書いてライバル。まさにそんな関係で正しいと思う。うん、熱い。

昼食の用意をしているクラスメイトを横目にしながら、僕は翔悟くんに言った。

「昼ごはんどうするの？ 購買？」

「いや、今日はいいや……腹減ってねえし金もねえ。コクハラは今日もパンツか？」

「まるで僕が毎日昼食にはぱんつを食べてるような言い方だね！」

「え、ちげえの？」

「食べないよ！ いやもしかしたら食べるといふ未来もあるかもしれないけど、少なくとも今現在まで食べたことはないよ！」

「パンツを食うことも出来ねえのに、お前はパンツ好きを名乗っているのか？」

「なん……だと？」

そこまで言われて黙っている僕ではない。机の横にかけてあるバッグから一枚のぱんつを取り出し、翔悟くんの机に叩きつけた。ネット調べて学んだ完璧なたたみ方で収納していた。ちなみにこの淡い桃色のぱんつ、デザインを重視したことにより通気性が損なわれ、女性からの人気は対して高くない代物だ。少々装飾過多も取れるデザインは内股周辺や尾骨辺りを傷つけてしまい実に不評だが、デザイン性のみを評価すれば文句なしの一品である。先日ワゴンセールで買ってきました。

「君はもしかしたら冗談で言っているのかもしれないが、僕はぱんつを食うことなんて何の苦にもならないぞ？　むしろ、ぱんつと一体化することによって新しい何かを得る事が出来るかもしれないとさえ考える」

「だがコクハラ、お前は食えない」

「なに？」

翔悟くんは僕からぱんつを奪い取り、目の前に突きつけた。

「お前にとってパンツとは、食うものじゃないからだ」

「——っ！」

言葉が出なかった。翔悟くんが向けてくる視線に耐えられない。

僕自身がプライドという小さなもののために奥へ追いやられた心を、容赦なく突いてきた。

敵ながら、天晴れっ！

僕の様子を見て翔悟くんは勝ち誇ったように笑い、握ったぱんつを僕へ返した。すまない、やはり僕はまだまだ小さく未熟だ。こんな一枚のぱんつさえ守れないようで、何がぱんつを愛するだ……っ。僕は膝を折り、翔悟くんにひれ伏した。

「……君の言うとおりだよ。ありがとう、目が覚めたよ」

「随分とぐっすりタイムだったみたいだからな。五時間目が始まる前に起こしてやったんだよ」

「ありがとう。ついでに周りの目がとても冷たいことにも今更気づいたよ」

「気にすんな。入学当初からずっとそうだろう？」

「そうだね……」

意気消沈して席に着いた。ぱんつはしっかりとしまっておこう。

ぱんつと入れ替わりにバッグから弁当箱を取り出す。両親はどちらも早朝に仕事へ出かけてしまうので、弁当はお手製だ。と言うと立派に聞こえるかもしれないが、僕に料理なんてイケメンスキルは無く、タッパーに詰め込んだ白いご飯と、適当に焼いた巨大卵焼きが僕の弁当だった。肉が食べたいですお母さん。

だるそうに机に突っ伏している翔悟くんの前で弁当を食べる。

通称「告白ハラスメント」によって僕がぼっちになりかけていたのを救ったのは翔悟くんだ。この侘しい弁当を便所で食べる事になっていたら、僕は今頃心が折れていただろう。野望とかそういうことを言っている場合じゃなかったと思う。

彼は、僕が関わったことによつてクラスから浮いてしまったと思う。きっと僕にさえ出会わなければ今頃彼の周りには可愛い女の子たちが集まってきたりきやーきやー言っていて、きっと彼女の一人や二人ゲームをするような感覚で作っていただろう。そう思うと、ほんの少しか申し訳ない気がした。ほんの少ししかないのは、それでもラブレターを貰っているからだ。いちいち自慢してくる。僕の野望が叶ったとき、彼にはばんつを脱がしてはいけない刑でも受刑させてやるつもりでいる。ごめんね。

「失礼しまーす」

翔悟くんを処刑する方法を妄想していると、教室の前のドアが開いた。続いて、三人の学生が入ってくる。胸元のバッチを見ると、全員が二等生なの分かる。

卵焼きを口に運びながら、ちらつとそちらを盗み見すると、見覚えのある顔が一つだけあった。

「はいはい、ちゅうもーく」

片手を上げて幼稚園児を集めるかのように自己アピールする女学生。後ろで結んだショートボニーテールがトレードマークで、はにかんだ笑顔がとても魅力的に映る。学園でも人気があるとして有名な人だった。

「かみやまいつき 神山樹でーすっ。ほんのちょっと時間貰ってもいいかなー？」

クラスメートがなんだなんだと神山先輩のほうへ目を移した。

神山樹先輩。胸元に合計五つのバッチが輝き、嫌でもそこに目が行く。人気があるだけではない。こういう人物が持つスキル、才色兼備。バッチの数はそのまま、彼女がエリートだということを示している。

龍泉学園の特殊なところはこのバッチにある。

通称「バッチシステム」。簡単に言えば、成績優秀者などにバッチが送られ、その数によって生徒を区別する競争システムだ。学年のバッチもその中に含まれ、二等生は僕ら初等生がつけている「種」を象ったバッチに加えて、「若葉」を象ったものを胸につけている。ちなみに三等生になると「花びら」を象ったものになる。

このバッチシステムは、卒業用件にも関わる。学年バッチ三つとそれを合わせた合計十個のバッチの提出が卒業の条件だ。人によっては三年間で卒業できない人もいるが、それは巷で言う留年扱いにはならない。一応生徒は三年間での卒業を目指す、それが達成出来る生徒はそう多くない。一部の成績優秀者が先頭を突っ走り、あとの生徒はちまちまと点数を稼ぎながらバッチを手に入れるのだ。

僕はまだ、学年バッチしかつけていない。入学当初に一度テストがあり、そこで学年一位を取った子が「成績優秀バッチ」を貰っていた。つまり、そうしたものの一つ一つが、差に繋がっていくシステムだ。

「うっは、マジ可愛くね。流石学園のアイドルだな」

寝ていたはずの翔悟くんが神山先輩の登場と共に飛び起きていた。実にめんどいである翔悟くんにとって神山先輩は格好のえさだ。何せその美貌がハンパじゃない。どちらかというと童顔だが、ただし幼いわけではなく、ほんのりと乗った化粧が助成らしさを感じさせる。学園のアイドルという使い古された言葉を当てはめる事に一切の不思議は無く、僕も彼女を見た途端、引きずられるようにしてどんなぱんつをはいているのか想像してしまうほどだ。

「おいコクハラ、樹先輩にするわ」

「何が？」

「昼飯」

「おい！」

リアルにやりかねない。そんなことをしようものなら学園全ての男子学生を敵に回すことになる。彼の身のためにも僕の妄想のため

にも必死になつても止めなければならぬ。よつて僕は、冗談だと分かりつつ（半分くらいけど）も、よだれを垂らしてまさに獲物を狩ろうとする彼の腕を掴んだまま、神山先輩に注目した。

「六月に審判員の更新が行われるのは皆知つてるよね？」

「知つてまーす！」

後ろで翔悟くんが答えた。やめてくれ、君に注目が集まるということは僕が視界に入ることなんだぞ。

神山先輩は軽く微笑み返して一蹴し、話を続けた。

「あたし、それに立候補することにしました！ わーわー！」

自分で拍手をし、言葉で盛り上げる。この明るい性格が生徒たちに大人気なんだそう。なるほど、ぱんつの色は暗そう。

「そこで今日は、自己アピールしてきました！」

ぶい、と指を突き出す。それだけでクラスの男子は心奪われたように大声で囃し立てるようになる。僕も適当に便乗しておいた。

審判員。

この学園におけるバッチシステムの中で、「学内・課外活動成績」という部分において、その活動の内容を見極めてバッチを進呈するかどうかを判断する。それが審判員の役割だ。毎年数名が選出、後期と前期に分かれて二度に分けて選挙が行われる。それは全て学生主体らしい。生徒会と連立していて、条件として学年バッチを除くバッチが三つ以上なければ立候補することが出来ない。ある程度の成績を収めなければ公正な判断も出来ないと思われるからだろう。

神山先輩のバッチは五つ。うち二つが学年バッチだが、残りの三つは違う。腕が二本交差している形のバッチ。スポーツ優秀者に送られるバッチだ。何のスポーツで取ったのかは知らないけど、その辺りは翔悟くんにも聞けばすぐに教えてくれるだろう。

とまあ、全部学生証に書かれていることだけど、きちんと読んでる人は多くないだろうなあ……やたらと堅苦しい説明だったし、ケータイ電話の説明書ばりに分厚いし。

「あたしはね、不正が大嫌いです」

神山先輩は突然そう切り出した。アイドルに違わぬ愛らしい瞳はどこかへ消え、いたって真面目な、言うなればこれこそが神山先輩の本質、スポーツマンの目になった。

「去年の審判員は酷かったんだよ。町内でゴミ拾いでもすれば直ぐにバッチが貰えた。どこを取ってもあまあまな判定ばっかでさ、どーしてこんな努力もしていない人たちがバッチを貰っていい顔してるんだろって、ずっと疑問だった」

神山先輩の口調は毒を吐くようなもので、力強かった。

僕らはその時期のことを知らない。が、学生の活動を学生が監視するというのは、そういうリスクが付きまとうものなのだろう。

「まだ、一等生の人たちは経験してないかもしれないけど、特殊活動のバッチは判断がとて曖昧なの。だから、基本的にやることはなんでもいい。そりゃあ、ゴミ拾いだって立派なことだけどさ、それ一回で優秀者っておかしくない？ おかしいよね？ 一年くらい続けてたってのなら別なんだけどね」

身振り手振りを加えて、ポニーテールを揺らしながら話をする神山先輩に、クラスメートは箸を動かすことを止めていた。

「そういうところをきっちりしていこうと思うんだ。甘いのも卑怯なもの嫌。一等生には不利な話みたいに聞こえるけどさ、バッチシステムは競争なんだよ。そこんとこしっかりしなきゃ、フェアじゃない」

「その通りだ！ 全力で同意する！」

翔悟くんがガッツポーズを取りながら立ち上がった。なんて迷惑な。

「不正をしてバッチを貰うなんて、キスもせずに女の子をやっちゃまうようなもんだ！ そういうんじゃないだろ。その過程が大事なんだ。おっぱいにつくのも良いが、ムードを作らなければ真の感動を得ることは出来ないっ。そうだろ、コクハラ！」

「僕に振らないでよそんなリアルな話！」

なんでこの人はこんなに人の目を気にしないで発現出来るんだ。
頼むから僕を巻き込まないでくれ。ああほら、氷点下とも劣らない
冷たい視線が四方八方から……。

「君、面白いねえ。名前は？」

神山先輩がニヤリと、実に恐ろしい笑みを浮かべてこちらに歩み
寄ってきた。周りのみんなは誰も気づいていない。きっと女神の微
笑みのように見えるのだろう。いや、実は僕もそう見えてはいるん
だけど。可愛いです。

「大山翔悟っす！」

「大山くんね、君、あたしのサポーターにならない？」

「さ、サポーター？」

頭を腕の中に隠して、二人の会話を聞いた。

「そ。六月にある審判員選挙で、立候補者は何人かのサポーターを
つけられるの。学年とかあんまり関係ないから、自分に有利になる
人をサポーターに置くんだけど……」

「是非っ。全力でサポートさせていただきますっ」

「ありがと。決定したらこっちから連絡するよ。で、もう一つ。今
さっきコクハラって言った？」

「え？ ああ、言いましたけど。こいつですよコクハラ」

ぐい、と襟を持ち上げられて僕の防空壕が破壊される。視界が一
気にクリアになり、目の前に神山先輩の顔が現れた。思わずドキッ
としてしまうような顔立ちだが、僕がドキッとしたのは違う理由で
ある。

「コクハラくん……このクラスだったんだねえ……」

粘り気のある声色で、僕にしか聞こえないような声量で言った。

「コクハラじゃありません君島です」

「どっちでもいいじゃん。コクハラの方が呼びやすいし」

「あんまり変わらないでしょう！？ だったら本名の方で呼んでく
ださいよ！」

「あいつかわらず可愛い顔と性格してるなあ。色んなお姉さま方が

ら声かけられなかった？ 私の足をお舐めなさい的な」

「僕はDMじゃないんでそんな美味しい展開があっても揺らぎませんよ。あ、いや、くっ……（ぱんつが見えるかもしれないと考えたら無しじゃないじゃないか！）」

「すっごい揺らいでるじゃん」

「何を言いますか。そう、ぱんつさえ無ければそんなものに揺らぎは、いや、くそっ、一体どうすれば……」

気が狂いそうだった。

「まあ、いいけど」

顔を離すと、いつものアイドルっぽい愛想を振りまく笑顔に戻った。

僕と神山先輩は既に二度ほど顔を合わせた過去があった。

一度目はあの悪夢の入学式の直後。どうやら竜胆先輩との一件を遠目に見ていたらしく、その変態性だとか積極性だとか良く分からないことを興奮しながら語られた。正直何を言っていたのか良く分かっていない。その時は僕も、ああ、この人は可愛らしいぱんつをはくご婦人なのだろうかと、心穏やかに先輩を見つめていたことくらいしか覚えていない。

しかし、二度目。購買にパンを買いに行こうとしたら突然拉致された。校舎裏に連れて行かれ縄で縛られた挙句、『ねえ、パンツ好きなんでしょ？ 見せてあげよつか？』とか思い出すだけでも鼻血吹きそうなことを耳元で囁くように言われ、その後数十分に渡って理性と本能をバトらせた。果たしてどんな目的があったのか分からないが、その時から神山先輩にある種の苦手意識が芽生えたのは間違いない。

つまるところ神山先輩は生粋のDSであり恐らく学園一のエロ子であるのだが、これだけ聞くと僕とはいい関係を結べそうな素晴らしい先輩のように聞こえるだろう。しかし、その実態は真逆で、彼女は僕の敵に位置する人だったのだ。

「ふふっ」

少女と呼べるような年代の女の子が見せるとは到底思えないような妖艶な笑みを見せ、神山先輩は左手で小さく下を指差した。僕の視線はそれを辿るようにして降りていき、

「ぶっ！」

神山先輩のほんの少し捲くれたスカートまで辿り着いた。僕の反応を見て、すつとスカートを下ろす。誰も反応しないところ、僕にしか見えていなかったようだ。

先輩の視線が「どう？」と嫌みったらしく聞いてくる。

僕は、怒りで我を忘れそうだった。

スカートの中身は皮肉にも、あの日と同じ。顔面を足蹴にされた中で見えたあのぱんつと同じだった。僕が彼女に絶望し、なおかつ恐怖を抱いたあの瞬間。

薄緑の、なんだかふわふわした可愛らしいぱんつ。

まるで女子中等生がまだ下着の選択をすることを覚えていない頃、とりあえずこんなもんでいいかな、くらいの気持ちで着用している純粹さ満点のぱんつだったのだ。これの意味するところは一体何か。

神山先輩がそのぱんつをあえて選択しているとすれば、それは虚偽のためである。人の性格や生活習慣によつてぱんつとは常時選択されていくものだ。神山先輩のDSさとエロさからして、あんなぱんつを「わざわざ」選択する意味合いは見出せない。とすれば、神山先輩がぱんつという存在を「見えてしまっても仕方の無いもの」として認識していると仮定して、あのぱんつは彼女を隠すものに違いない。

いわば、ペルソナ。

だが僕はその全てを否定する事は出来ない。彼女にとってのベストぱんつだとは思わないが、ペルソナを被り続ける彼女を実直に表現したぱんつでもあるのだ。ある意味では、彼女の心の闇と言つても過言じゃない。だから僕はそれを否定しきることが出来ないのだ。それでも、それでもあえて僕は怒りたい。誰のためでもない、ぱ

んつのために。ぱんつは泣いているのだ。そんな気持ちで、そんな用途のために自分をはかなくてくれと。僕にはそれが聞こえたのだ。やはり、この学園のぱんつプロデュースをすることが急がれる。

こんなことが女学生の数だけ存在しているのではないかと考えると、僕は胸が痛くてたまらない。

僕は毅然とした態度を心がけながら、鼻血を拭って言った。

「神山先輩、どんな誘惑があるうとも、僕はあなたのサポーターにはなりませんよ」

「おいコクハラ、お前折角樹先輩が声かけてくれたのになんつーこと言っただよ」

すると神山先輩は手を大振りしていいのいいの、と翔悟くんに言った。

「コクハラくんがあたし側についてくれないことは最初から分かってたし。ま、無理矢理連れて行くことも出来るんだけど、そうするのはあたし的にも得策じゃないかなって」

「どういうことですかそれは」

「どういうことだろうね？」

ふふっ、と不適に笑って見せた。ぬう、実につかめない先輩である。

同行していた二人の先輩がやってきて、神山先輩に何かを呟いた。時間がどうのこうのと聞こえたので、次のクラスにでも回る予定なのだろう。軽くそれに頷き返すと、「じゃねっ」と言っ僕にデコピンをかましてきた。

ハートキャッチ僕キュア。今のはやばかった。くそっ、たかだかアイドルじゃないか。外見や行動だけに惑わされるな僕っ。彼女に薄緑のぱんつに怒りを覚えたばかりなのに、これじゃあ格好がつかないじゃないか。

先輩は軽くお別れの挨拶を済ますと、ポニーテールを跳ねさせて教室から出て行った。

彼女が去ったあとともクラスのざわめきは収まらなかった。そりゃ

あそつだろう。入学式後の全校集会で一度だけしか見たことのないだろう先輩がこんなに近くで話していたのだ。一部の熱狂的ファンからしたら涎もののイベントだし、そうでなくてもこの空気に熱された生徒は多い。また写真付きテレカとか高額買取されるのだろうか。

「おいおいコクハラ、なんだよお前。樹先輩と知り合いだったならそう言えよ」

クラスメートと同様に興奮した様子の翔悟くんがわざとらしく肩を組んできた。

「言えよって、別に聞かれなかったじゃないか。それに僕、正直神山先輩は苦手だし……」

「苦手ってあんなに可愛いのか？ しかもデコピンまでされちまつてよお、羨ましいから額舐めさせろ」

「やめてっ！ 顔を近づけないで！ いくら君がイケメンでも流石に気持ち悪い！」

「美少女の手垢のためなら致し方なし」

「そんなキャラじゃないだろう君！？」

冗談だよ、と言って翔悟くんは僕から離れた。くそ、リア充スキルというやつか。

「あー、しかしサポーターって何すんだろうな。スカートの中に顔とか突っ込んでいいのかなあ」

「ダメだろう普通に！」

「いやでもさあ、やっぱこういうイベントってのは男と女の仲を展览展示させるわけじゃん？ 何か感触も悪くなかったし、結構イケんじやね？」

「そこだけ聞くと同意出来るけど、顔は突っ込めないと思うよ」

「え、結構リアルにマジで？」

なんでそんなに真面目に聞き返すんだよ。え、何、僕が間違ってるの？ イケメンの世界ってそういう風に構成されてるの？

その後も、審判員選挙の宣伝の為に何人かの上等生がやってきた。

しかし、一番初めに来たのが神山先輩とあってか、クラスの盛り上がりや反応は著しくなく、立候補者のマニフェストを読み上げるだけの自己アピールも相まって、僕のクラスでは神山先輩一色の投票構図となりそうだった。

そんな、なんだかグダグダしてきた空気の中に彼女は風のようにやってきたのだ。

「失礼します」

スパーンッ！ と叩くような音が鳴ったかと思えば、教室のドアが勢い良く開けられた音だった。驚いた人たちは僕も含めてそっちに意識を向けた。

「り、竜胆先輩……？」

そこに立っていたのは、くいつと眼鏡を上げてクラス全体に射殺すような視線を送っている竜胆先輩だった。胸元には七つのバッチ。学年バッチを除いても、五つのバッチを習得している。

「『永結凍土の女豹』……だっけか」

後ろで小さく翔梧くんがそう呟いた。それは、竜胆先輩の学園内で噂される二つ名。僕で言うところのコクハラのようなものだ。

クラスメートたちはその原因不明の威圧感にすっかり怯えてしまっている。視線を必死に外そうとする人、お喋りを止めて相手を刺激しないようにしている人、我関せずを装いつつも、ちらちらと竜胆先輩を伺っている人。これが、今の竜胆先輩が持つイメージだった。

（逆らうな、殺されるぞ）

そんな空気が教室内に充満していた。

一等生である僕らは実際に竜胆先輩のことを知っているわけではない。事実、彼女と顔を合わせたのは神山先輩と同じく全校集会の時だ。ここで、二等生代表として挨拶した竜胆先輩は、当時入学したで浮かれていた僕たちに向かって第一声をこう飛ばした。

『後悔したくなければ口を噤みなさい。私が話そうとしているのに喋り声が聞こえるというのは、命も惜しくないと取って良いのね。』

あまりに酷いようであれば、この私が自ら……抹殺します」

その時既に、僕がアイアンクロー・スラムによって意識を闇の底に沈められたというのは一等生の大体には伝わっていた。つまり、彼女の「抹殺する」という言葉が決して脅しからではないという事を僕は身を持って体感しているのだった。

この経験は二等生も変わらないらしく、『永結凍土の女豹』というのは同等生たちが言い回つたらしい。決して表情を変えない、冷たき令嬢。楯突くものを一人残らず抹殺していき、噛み付いた相手を離さない。僕らが知っている竜胆先輩の全容とは、主にこんなものだった。

「モラルがなっていて良いクラスね。でもその男子。みんなが私に注目している中で一人だけご飯を口に運ぶのはどうかしら。あなたみたいな連帯感の無い人が秩序を破壊するのよ。反省しなさい」

「す、すいませんっ」

顔を伏せて知らんふりをしていた男子の一人が名指しされ、彼は急いで謝っていた。

「その女子。今あなたが座っている席、それはあなたの席？」

「そ、そうですね……」

「随分とメルヘンチックな机ね。どうしたのその落書きは」

「じゅ、授業中暇だったので……」

「暇だった？ 授業が？ ふざけてるわね。それに、学校の備品を汚しておいて良くもそんなのうのと生活出来たものね。それはあなたのものじゃないのよ。我が物顔をしたいのだったら、丁寧に扱いなさい。さ、今すぐそれを消して。目障りだわ」

「は、はいっ」

ああー、最初っから竜胆先輩節全開だなあ。もはや圧政とも取れる注意の数々に、クラスメートたちは自分が聞いた噂が嘘でない事を確信し始めているのが分かった。

「去年は、こんな生徒が特殊活動バッチを良いようにさらっていったわ。今年もきつと同じことが幾らか起きるでしょうね。でも、私

が審判員になった暁にはそれを許しません。公正な判断に基づき、甘えによって習得されたバッチは全て剥奪させて頂きます。無論、去年そういう方法で取ったバッチも丸ごと。だから安心して。一等生も二等生も変わらない、一緒のスタートラインに立つの」

そう。審判員のもう一つの権利とは、厳密な会議を経た末の「バッチの剥奪」だ。そんなことは悪質な事件でも起きない限り滅多に無いのだが、竜胆先輩の口ぶりを聞いている限り、彼女のマニフェストとはこの部分の厳重化なのだろう。誰得なマニフェストだ。やろうとすることは神山先輩と対して変わらないはずなのに、内容一つでこうも印象が変わってしまう。

「あなたたちも何の努力もしてないクズみたいな人間が優秀者としてバッチの数を重ねていくのを見るのは嫌でしょう？ だから、そういうものを防ぐためにも、私に投票し——」

そこで一瞬、誰にも気づかれなくらいの小さな間があつて、

「——なさい」

民主主義も顔が真っ青になる命令口調で、そう締めくくつた。

最悪だ。もう手の施しようが無いくらい最悪な演説だった。今クラスメイトたちが感じているのは恐怖じゃない。苛立ちだ。完全な上から目線に、男女問わずイライラしている様が見て取れる。現に、彼女を多少なりとも支持している僕ですら、気分を害するような演説だった。

このままでは竜胆先輩には一票すら入らないだろう。どうにか、僕がどうにか出来ないものか。

ぱんつの女神を救うための力を、僕につ！

「——っ!？」

僕は、彼女のスカートを直視した。意図的ではない。そこに視線が動いたのだ。

ゆらぎ。いやこれは歪みか。スカートの周辺だけ竜胆先輩から隔離されてしまったかのように、そこだけ現実から離れてしまっているかのような微妙な感覚。僕のセンサーが告げているのだ。後悔し

たくなければ、あのスカートの中を想像しないことだと。

だが、それは逃げである。

僕は勇気を振り絞り、勢い良く席から立ち上がった。

「竜胆先輩……」

「あつ、き、君島くん？ あなたこのクラスだったの……」

「そんなことはどうでもいいです。先輩、あなた今、黒のぱんつをはいてませんか」

僕の登場に驚いている先輩を完全に無視して、僕はさっきの違和感の正体を口に出した。

「なっ、何を……！」

「先輩から感じる微量のずれ。恐らくあなたは昨晚、明日は審判員選挙の宣伝の日だといって多少緊張していたはずです。お風呂に入ってもなんだか落ち着かない。湯上りにぱんつをはく時、ふと目に映ったいわゆる典型的な『勝負ぱんつ』。男で言うところの褌を締めるという気合を入れるための行為に、あなたは黒のぱんつを選んだ。しかし、あなたは反面今日という日のためにある程度用意を行ってきたはずだ。不安に感じることも何も無い。あったとしてもそれは人前に立つ緊張や当選に対する緊張ではない。なんなのかは知りませんが、そんな生半可な微妙な気持ちではかれたぱんつは、僕に救援信号を送ってきました」

まるで、今日という日にあつた選択をされたかのような黒ぱんつだが、その実彼女は勝負ぱんつを「つい」程度にしか思っていない。だから感じたのだ、この違和感を。見なくても分かる。選択することの出来る女の子のぱんつを予想することなど容易い。

「黒のぱんつとは一見して勝負ぱんつに選ばれがちなぱんつです。しかし、その実、黒という色がそういうイメージを焼き付けさせているだけで、万人に黒のぱんつが勝負ぱんつとなりうるかは別問題。本当に自分で選んだものならば、恐らく僕はこんな違和感を覚えなかったでしょう。あなたはきつと妥協した。いえ、間違いなく妥協したはずです。黒という色が、まるで自分を勇気付けてくれると錯

覚した！」

事件の犯人を告発するかのよう、僕は竜胆先輩を指差した。

「何故ですか先輩……あの日僕に見せてくれたぱんつは嘘だったっていうんですか……！」

悲痛な叫び。それが届いたのか、先輩は泣きそうな顔でわなわなと震えていた。クラスから「竜胆先輩を動揺させてるぞ……」「流石コクハラ。俺たちに出来ないことを平然とやってのける！」「正直引いた」などと僕に対する賛辞の声が上がっている。

だが僕も先輩をいじめるつもりは毛頭も無い。反省してくれればそれでいいのだ。僕は机の横のバッグに手を差し込んで、中を漁った。

「ちょうどいいです。今、先輩に似合うぱんつを用意しますのでこれをはいてぐっほあっ……！」

目にも留まらぬ速さで先輩の手刀が飛んだ。

地獄突き。指を伸ばしたまま相手の急所を突く、破壊力のある打撃技。鳩尾にめり込んだ先輩のか細い指は、折れる様子などなく僕を貫いていた。あまりの衝撃に僕は膝を折り、前かがみになった。

「君島くん。あなたの命、私が預かったわ」

なんか格好いいこと言ってるけどこの人僕を殺すつもりだー！

竜胆先輩は魅惑のふともで僕の頭を両脇から挟んだ。なんだこれ、天国か何かか。密着度は今までの中でも最大になり、おみ足からはとつてもプリティーな香りがした。ここに移住したい。

しかし、そんな僕の夢を打ち砕くかのように、今度は両脇に手を添えられ、ぐいっと上に持ち上げられた。

小学校の頃、教壇の上に立ってヒーローごっこのようなことをしたのを思い出した。そのくらい昔に遡らなければ見られない、とても貴重な光景が僕の前に広がっていたのだ。教室を高い位置から見下ろすこの視界。人の頭の上が見える状況なんてそう無いだろう。みんな各々、恐怖や驚きなどに表情を強張らせている。僕の後ろで一部始終を見ていた翔悟くんさえ、こめかみから一筋の汗を流

しながら僕を見ていた。

「パワー、ボム……」

誰かがそう呟いた瞬間、まるでジェットコースターに乗ったかのような強烈な落下が僕を襲った。内臓が揺れる。鳩尾を打たれて肺には空気なんて入ってなかったはずなのに、僕はふっと軽い息を漏らしてその感覚にさらわれた。

ありがとうみんな。この二ヶ月間、短かったけど楽しかった。

出来れば僕のことを覚えておいてくれると嬉しいな。コクハラじゃなくて君島のほうで。そういえば竜胆先輩は僕をコクハラって呼ばないんだよな。まあ、事件の被害者だし当然か。

背中に一瞬の衝撃を感じたとき、それを垣間見た。

黒のぱんつ。

「やっぱり、はいてたんじゃないですか……」

胸糞悪い。ぱんつの神は僕を裏切った。手を伸ばせば届きそうなその黒ぱんつを今すぐ引っぺがしてやりたかった。

「……」

竜胆先輩が悲しそうな顔で僕を見下ろしていた。

な、なんだ。そんなに僕にぱんつのことを指摘されたのがショックだったのか？ そうだとしたら少し悪い事をしたかもしれない。

罪悪感だか怒りだか、良く分からない気分に包まれて、僕は意識を失った。

2話

「私のサポーターになりなさい」

「はい？」

皮肉にも神山先輩に拉致された時と同じ校舎裏に連行されてきた僕は、竜胆先輩から突然そんなことを言われた。昼休みに購買に行こうとしたところを捕まったというところまで神山先輩の状況と一致している。今後気をつけたほうがいいかもしれない。仁王立ちした先輩は、僕より身長が低いはずなのに何故か見下ろされているような気分になる。長い髪の毛が日差しを遮って、眼前に影を作った。こええ。

「さ、サポーター……大胸筋サポーターですか？」

「何を言っているの君島くん。蛆に頭でも湧いたの？」

「おかしいでしょうそれ！ 僕の頭の中はどうなっちゃってるんですか！」

「ごめんなさい……少し言い過ぎたわ。頭に蛆でも湧いたの？」

「今更まともな言い方されても遅いですよ！」

初っ端から竜胆先輩節が炸裂していた。いや、軽くボケようとした僕も悪かったと言わざるを得ないが。

「そんなことより、先日のこと、忘れてはいないでしょうね」

多分審判員選挙の宣伝をした日のことだろう。

ちなみにあの後、僕が保健室で目を覚ますと夕暮れ時になっていた。言うまでもないが先輩は僕を献身的に看病したり帰り際に様子を見に来てくれたりはしなかった。流石です。

「君島くんのせいで大恥をかいたわ。責任を取ってもらいます」

「せ、責任って……」

僕は先輩の演説によって悪くなった空気をどうにか打開しようとして思っていたのは最初だけでしたごめんなさい。言い返そうかと思っただけ、冷静になれば正しいことなんて何ひとつしてません

でした。人の気持ちを考えないなんてぱんつラヴァー失格です。

「人が真面目に話をしている時に君は、その、私のし、しし、下着を――」

ギリツと齒軋りする音が聞こえた。ついでに顔も高潮しているけど、主に血が集まっているのはこぶしのように思える。僕は殴られまいと身を引いて構えながら言い返す。

「し、仕方が無かったんです。僕のぱんつ愛があれを許すなど」

「なに？ 言い訳があるなら聞けど」

言い訳したあとにそのセリフはおかしくありませんか。

「ま、まあ良いわ。思い出すと恥ずかしくなるだけだからこの話は止めましょう。そう、忘れましょう」

「そうですね……」

僕にとっても忘れない出来事だ。うん、忘れよう。ぱんつの神もきつと許してくれるはずだ。そう思おう。

ふう、と一度深呼吸してから、竜胆先輩は仕切りなおすように言った。

「サポーターのことを知ってるかしら君島くんは」

「いえ、そういうものがあるくらいしか……」

「そう。まあ別に説明する必要も無いわ。つまりはお手伝いさんみたいなものよ。選挙宣伝用のポスターを作ったり、私のスケジュール管理、演説文の推敲とか、そういうものを請け負う仕事よ」

「それを僕がやるんですか？ まだ入学して半年も経ってない僕が？」

竜胆先輩はそれに首を横に振った。

「というのは普通のサポーターがやること。君島くんは……そうね、別に何もなくていいわ。どうせ何も出来ないでしょうし」

「まるで僕が無能みたいな言い方しないでくださいよ！？」

「え、何か出来るの？」

そんな無垢な子供のような目で僕を見ないでください。僕は汚い大人なんです。ぱんつ選びなら、とか言おうとしたが止めた。命は

大切にするものだ、と、小学校の頃生き物を飼って学んだのだ。

「無能でした」

「そう。ならいいのよ」

何がっ？　ねえ何がいいのっ？　僕分らないよ！

「実際、私が君島くんをサポートに呼びたい理由は仕事をやってもらうためじゃないわ」

「え、じゃあなんで……」

すると、先輩は腰に手を当てて僕をビシッと指差してきた。

「君島くんを樹に取られるとまずいからよ」

「い、樹？　神山先輩ですか？」

「そう。なんだか樹と交友関係があるみたいじゃない。どこで会ったのか知らないけど」

何故ここで神山先輩の名前が出てくるんだろう。それに、樹って呼び方。ずいぶん親しい呼び名だけど、知り合いだったりするんだろうか。

「まあ、一応交流はありましたけど……でも、なんで僕が神山先輩に取られるとまずいんですか」

「あの子も知っているからよ。入学式のことを」

毒づくように言う。告白ハラスメントのことだろう。確かに神山先輩はそれを知っているが、それと僕がサポーターになることに何の関係があるのだろうか。むしろ、あの事件があった後だ。僕を遠ざけたいと思うくらいが普通だと思うが。

竜胆先輩は僕をちらちらと見ながら、言葉を模索するように視線を彷徨わせた。

「そ、その、君島くんを相手にすると調子が狂うのよ。初対面でいきなり、その、こ、恋とかなんだとか、あああああああ！」「ぶへえっ！」

とてつもない速度の鉄拳が予想だにしないタイミングで僕の左頬を襲った。あまりにも前動作が無かったので僕は軽々と吹っ飛んで地面に突っ伏した。

え、超理不尽。

「突然殴るの止めていただけますっ！？ アニメのコメディか何かと勘違いしてませんか！ そのうち死にますよ僕！」

「ご、ごめんなさい。今のは私に非があるわ。素直に謝ります」

耳まで赤くさせながら竜胆先輩は僕に頭を下げた。素直に謝られては僕もこれ以上何かを言えない。歯が折れてないか確認して安堵したあと、土を払って立ち上がった。

「……つまりはね、樹に君島くんを取られると、私への武器となりえてしまうのよ」

「不安要素は先に摘んでおこうって魂胆ですか」

「そうとも言っわね」

つまり、僕を使って妨害工作をされるのを恐れているのだ。神山先輩がそんなことをするとは思えないが、まあ僕も神山先輩側にくく気は最初からさらさら無かったので、竜胆先輩の不安は杞憂に終わるわけだが。

「安心してください。そんなことしないで、僕は神山先輩のサポーターにはなりませんよ」

と、思っていることを伝えた。すると、竜胆先輩は「へ？」と彼女らしからぬ気の抜けた声を上げた。

「な、ならないの？ 樹に誘われても？」

「なりませんよ。僕、あの人苦手ですし」

「だって、樹よ？ 龍泉学園のアイドルで男子生徒の人気投票ナンバーワンかつスポーツ万能で明るくて凄く良い子で自分の意見もしっかり持つてる、あの完璧な神山樹よ？」

「ず、ずいぶんと推しますね……」

敵視をしていそうな割には、実は認めているのかもしれない。とつか顔が近いです。迫りすぎです。どんだけ神山先輩が好きなんですか。

「ありえない……樹の魅力に悩殺ゾッコン状態にならない人なんて初めて見たわ」

「そんな大げさな……」

「大げさでもなんでもないわよ。あの子の周りには常に誰かがいる。あの子のことは常に誰かがサポートしてくれているわ。女子も男子も、樹を嫌ってる人間なんかどこにもいない」

少し視線を落としながら、竜胆先輩は神山先輩をそう評価した。

「まあ、僕だって嫌いじゃありませんけど、可愛いですし。でもやつぱり得意ではないですね神山先輩は」

「どうして？ どこが苦手なの？」

「まず襲われたからっていうのはあります」

「お、おお襲われた？ 樹に？」

「ええ、貞操の危機でした。彼女は僕の好物を餌に使い、僕を奴隷か何かにでもしようとしていたようです」

そんな姿の神山先輩が想像出来ないのか、いまいち理解してなさそうな顔で頭を悩ましている。あの時の神山先輩は少なくともアイドルの姿ではなかった。夜の、と付け加えたら分からないが。

「あとはぱんつですね」

「殴るわよ」

幾度と無く僕を葬ってきた右手こぶしを突き出して言った。

「そんな豹変しないでくださいよ！？ 別に冗談で言ってるわけじゃないんですって！」

「殴るわよ」

「いや、あの、その」

「殴るわよ」

「今日はいい天気ですね先輩」

「夕方から曇るって天気予報で聞いたわ」

さいですか……。どうして三回言った。恐怖につい屈してしまっただじゃないか。くそう、嘘でもなんでもないのに……。

僕は諦めて、早くここから解放されたい一心で話を進めた。

「とにかく、そういうわけで僕は神山先輩のサポーターにはなりません。だから竜胆先輩も僕をサポーターに無理にしなくていいです

よ」

大体、告白ハラスメントがあつた後だというのに、竜胆先輩のサポーターに僕というのはあまりに無理がありすぎる。イメージとしては最悪じゃないか。一等生には僕が「コクハラ」という名前で相当の有名人士として通つてしまつてゐるし、その被害者である竜胆先輩が僕を選んだとあつては、一体何事だと騒がれてしまう。

「えっ、そ、そういう話になるの？」

「違つんですか？ 結局先輩は僕を困つておきたかつたわけでしょう？ ならその必要が無いなら僕をサポートにする意味は無いじゃないですか」

「それはそうだけど……でも、私とこうして対等に話せるつていうのは、凄いスキルじゃない？ 仲間に加えておいたほうが得だと思うのよ」

「止めておいた方が良いです。入学式の一件があつてから、あまり僕のイメージは良くないです。選挙に響いたら僕が申し訳ないです。それに、対等に話すくらいなら僕じゃなくてもいいでしょう」

「それもそうだけどっ！」

今度は語尾を荒げて僕に迫ってくる。殴られるかと思つて反射で防御体勢を取つてしまった。

「な、何か……？」

「……」

だんまりだつた。何が悪いのか分からない。自分で言つて虚しいが、僕をサポートにすることなんて百害あつて一利なしだと思つ。あ、やっぱり結構きつい。人生何が転機で変わるか分からないね。

このまま押し切られてしまうのは嫌だったので、適当なところで話を切り上げて帰ることにした。

「じ、じゃあそういうことで僕は帰ります。投票が始まつたら竜胆先輩に入れるので、その辺りは安心してください。では、また今度……」

すつきりしないが、どうしようもない。このあといざこざがあつ

てまた投げ技でも食らおうものなら本気で死にかねない。平和的に解決出来るうちが吉だろう。昼食の時間もギリギリ残っていそうだし。ゲテモノの菓子パンがおよそ決定したけど。バナナ味のメロンパンとか。

「……のよ」

背を向けた瞬間、竜胆先輩に腕を取られた。明らかに人を引きとめようとする握力の入れ方ではない。腕をへし折ろうとする力が僕を襲う。

「い、痛いです先輩」

「……いのよ」

何か言ってみたのだが、よく聞き取れなかった。先輩は顔を伏せて、まったく視線を合わせようとしない。思いのほか顔が紅潮している気がする。噴火直前、怖い。

「な、なんです？ よく聞こえ無かったんですが」

「いないのよっ！」

突然の怒声に思わず縮こまった。同時に腕からミシツという音が聞こえたが気のせいにしておこつ。いちいち気にしていたら身が持たない。言葉通りの意味で。

「いないのよっ。私のサポーターになつてくれる人がっ！」

「……」

ぽかーん、というのが正しい表現なのだろうか。間抜けにも開かれた口を慌てて閉じて、今の言葉を頭の中でもう一度反芻してみる。いない。サポーターになつてくれる人が。

うん。まあ実に説得力のある言葉だった。人徳という言葉からおよそ無縁な性格をしているだろう先輩のサポーターになることを申し出てくる人はおるか、頼まれてしぶしぶでも了承する人がいるかどうかもわからない。

先輩も人に恥ずかしいことをカミングアウトしたかのように、屈辱にまみれた表情でそっぽを向いていた。永結凍土つてなんだっけ。マグマみたいに真っ赤なんですがこの人。サドの気はないと思って

いたが、少しぐつときた。

「もしかして友達いない嘘ですなんでもありません許してください！」

ミシツ、からベキツに昇華した腕の軋みに危機感を覚えて言おうとしていたことを遮った。というかそんなことしたら凶星って言っているようなもんじゃないですか。なんだろう、急に親近感が湧いてきた。入学当初便所飯を覚悟していた僕の気持ちをととも理解してくれそうな人に出会ってしまった。遭難している時によく人を見つけた時のような安心感に似ている。僕、竜胆先輩と上手くやっていけそうな気がしてきたよ！

「先輩」

「な、何よ。なんでそんな嬉しそうな顔するのよ」

「サポーターの役、僕に任せてください。きつと役に立ちましょう！ ついでにお昼ご飯一緒に食べましょう！ いいですよね？」

「え、ええ……」

なんだか若干引いている気がするがそんなこと構うもんか。良かった。まだ入学してから出くわしていないシチュエーションだが、翔悟くんが学園を休んだらご飯を食べる友達がなくてどうしようかと毎日悩んでいたんだ。朝、翔悟くんが学園に来ていた時の安心感、僕のほうが先に来ちゃって休むんじゃないかと一時間目が始まるまでドキドキしていた不安感、そのどちらからも開放されるんだ！

「君島くん、私をぼっちか何かだと勘違いしてない？」

「え、違うんですか」

「違うわよ！ あなたと一緒にしないで！」

「がーん！」

リアルにショック。同じ趣味の友達を見つけたと思ったたらとんでもないにわかだった時くらいショック。

「ご、ごめんなさい。今のは失言だったわ。謝ります」

そう言って先輩は僕の背中をさすってくれた。泣いてなんかいな

いやい。

ともかく、竜胆先輩がぼっちではないという衝撃の事実を知ってしまった僕だったが、サポーターがいないというのは結構深刻な問題のように思えた。竜胆先輩の威圧的な態度について来られる人がいないのだろう。竜胆先輩とてサポーターがいらなわけでないと思う。本当に人材がいなかったのだ。そこで見つけたのが僕。先日
の事件の罪滅ぼしという脅し要素も兼ね、竜胆先輩の雰囲気は一切
屈する様子の無い僕に白羽の矢が立ったということだ。

僕は入学式の日
に竜胆先輩の真のばんつを知ってしまったている。
あれを覚えている限り、僕が彼女の高圧的な態度にいちいち怯える
ことはおよそ有り得ないだろう。とか言ったらまた殴られそうな気
がするので言わないけど。

「その、審判員には最低一人のサポーターが絶対必須条件なのよ」
「どうしてですか？」

「審判員が生徒会とある程度連立しているのは知っているわよね。
審判員として正式に認められると、同時に生徒会役員の名簿にも載
るのよ。つまり、仕事の量が膨れ上がるってことなの。そんな時に
審判が始まってしまうと仕事の両立が難しいでしょう？ そんな時
のために、一人以上のサポーターが必要なの」

「え、サポーターって選挙の時だけじゃないんですか？」

「違うわ。正式に審判員のサポーターとして名簿に登録される。あ
る意味では、サポーターも生徒会に組み込まれているわけね」

別にいつも暇をしているから困りはしないが、僕のような人間が
そんなポストについてしまって大丈夫なのだろうか。分不相応な気
がするが。

「それでも、引き受けてくれるかしら」

先ほどまでの威勢はどこへ行ったのか、一步引いた感じの頼み方
で僕に聞いてきた。というか先輩、僕がすぐに了承したらこの内容
は説明されていたんでしょうか。

兎にも角にも、僕には特に断る理由は無い。むしろあるのは先輩

の方だ。

「別に僕は構いませんが、さっきも言ったとおり僕がサポーターになればイメージが最悪だと思いますよ。選挙なんてイメージが結構大切じゃないですか。大丈夫なんですか？」

「私は気にしないわ」

凜とした態度でそう返した。が、すぐにまた赤くなって、

「それに、その、君島くんは、私に、その、こ、こここここ」
コイキ。ングのモノマネですか？ とか言ったら殺される予感があったので喉の奥に押し込んだ。僕だって学習する。つまりこのままでいたら殴られるということだ。あれ、どっちにしてもダメじゃん！
僕は彼女の暴走を止めるべく、遮るように言った。

「ひ、引き受けます先輩。先輩が気にしていないなら僕が断る理由はありませんからっ」

「そ、そう？ 本当に良いのね？」

僕はそれに激しく頷く。もうどうとでもなればいいよ。

先輩は一安心したかのようにほっと胸をなでおろし、今まで緊張に張っていた表情を崩した。その一瞬に、僕は心臓を掴み取られたかのような衝撃を覚えた。

長い黒髪の隙間からほんの少し見えた表情は、永結凍土の女豹などという物々しい称号とは打って変わった、年相応の少女のものだった。通学路で見た、灰色のアスファルトを彩る桜の花びらが作り出した桃色の絨毯を思い出す。表情を変えないだなんて誰が言ったんだ。竜胆先輩だつて、こうして一喜一憂している。なんだか、竜胆先輩に対する世間の評価の低さが無性に腹立たしくなった。いや、むしろそういう評価を与えている竜胆先輩にしろつか。こういう顔を少しでもみんなに見せてあげれば、すぐに評価は変わるはずなのに。竜胆先輩がサポーターに僕を選ぶなんていう苦渋の選択に迫られずに済んだのに。

「……」

先日の黒いぱんつを思い出す。まるで小手先のごまかし技術。入

学式の純白ぱんつに感動を覚えた僕は黒のぱんつに絶望し、その時の情動に身を任せて暴走してしまった。しかし、冷静になってみればあれもまた一つの選択。彼女があの日あの場面で黒のぱんつを選択した彼女の心情とはなんだったのか。

そう、それは何かに似ている気がした。

「……神山先輩の、緑のぱんつ」

学園のアイドルである神山先輩が、アイドルであるために選択したぱんつ。

間違いない。神山先輩がはく緑のぱんつと、竜胆先輩がはく黒のぱんつは一致する。一体彼女らは、ぱんつで何を隠しているのだろうか。あのぱんつの奥には、何が潜んでいるというのだろうか。僕はほんの少しだけ、それを覗いてみたいと思ってしまった。

変態じゃないぞ。

「ありがとう君島くん、助かるわ。それで、早速で悪いのだけど、今日の放課後は空いているかしら？」

「放課後ですか？ 空いてますけど、何かやるんですか」

「生徒会にサポーター登録に行くのよ。明日から活動出来るように今日中に済ませておきたいの」

「分かりました。授業が終わったら向かいます」

「お願いね」

先輩とは校門の前辺りで別れた。先輩はそのまま教室へ。僕は残飯を漁りに購買部へ向かった。

しかし、生徒会か……。まったく面識の無い人たちと顔を合わせるのはなんだか緊張する。こんなややこしい学校を纏めている生徒会だ。きっと生徒会長なんかは凄いやり手の人なんだろう。優しい人だといいなあ……。

あることないことを妄想しながら購買部に到着すると、無常にも昼休み終了の鐘が鳴り響いた。あまりの絶望感に音の余韻で腹を満たすとかわけのわからないことを考え、僕は購買部のおばさんに背中ではれを告げながら教室へ急いだ。

じゃらじゃらとポケットの中で五百円玉がうるさく泣いていた。

目が、痛い。

放課後。先輩に言われた通り生徒会室までやってきた僕であったが、いくら特殊な学園と言えども認めがたい光景が目の前に広がっていた。

一言で言えば生徒会室はゴージャスな宮殿だった。もうちょっと詳細に言い表すと、扉は僕の背丈の三倍はあるうかというでかさで、取っ手は金ピカ。傍に白い手袋が置いてあり、「入室の際には必ず手袋をはめて扉を開け閉めするように」という、目の前のブツが明らかに高級品であるかのような注意書きがされていた。中に入るとまず赤い絨毯が入室者を迎える。恐らく大理石であるう白く艶やかな床が一面に広がり、その広さは学内一番だとすべての部屋を見回っていない僕でさえ容易に想像のつく面積だった。なんだかマーライオンの贗物らしきものが部屋の四方に備え付けられ、口から水を流している。その清涼な音が自然の豊かさを融合させ、安らぎの空間を作り出している。天井を仰ぎ見れば豪華絢爛なシャンデリアが部屋中を照らし出し、生徒会室の神々しさを演出していた。

どこだよここ。石油王の宮殿か。

赤い絨毯を踏みながら、慣れた足つきで進んでいく竜胆先輩についていく。間違った場所を踏んだら爆発するとかいう仕掛けがあるんじゃないかと先ほどから疑心暗鬼で、先輩の歩いた場所を一寸違わずなぞっています。チキンです。

「あれが生徒会長、轟季冬次郎会長よ」

絨毯の奥の奥。中学の頃に見学に行った国会議事堂で見たようなデスクがそこに存在していた。そしてその更に奥に、誰が見ても高価だと分かる黒いチェアに腰掛けた、一昔前の軍人かつ、と突っ込みたくなるような格好の男がいた。明らかに学園指定の制服じゃ

ない。今から戦争に行つてきますと敬礼されたら思わず返してしまふくらい、バリバリの軍人服だった。そして、遠目に見ても分かる軍服の中に隠された筋肉。ムキムキではない、体型を引き絞るための筋肉。喧嘩でも吹っかけようものなら確実に殺されそうだ。

「轟季会長、お久しぶりです」

竜胆先輩が声をかけると、会長は顔をゆっくりを上げた。糸目、かと思つたが違う。目を閉じているだけだった。瞼を閉じたまま、会長はその口を開いた。

「竜胆あかり、か。久しくはないだろう、入学式の時に会つたばかりじゃないか。それと、そっちの生徒は？」

目を閉じているはずなのに僕の存在に気づいていた。不気味にも、そのままの顔で僕のほうを向いた。

「ぼ、僕は今年この龍泉学園に入学しました、君島幸一といいます」

「君島幸一……ああ、君が噂のコクハラくんか」

「僕は君島です」

「ふむ。自分の名前は間違つて欲しくないタイプの人間と見える」

「普通誰だつてそうでしょう!？」

あ、しまった。会つて間もない、しかも生徒会長にツツコミを入れてしまった！

「そう、フランクで構わない。私が生徒会長である轟季冬次郎だ。以後よろしく」

「よろしく願ひします……」

良かった。見た目はなんだか怖いけど、優しそうな人だった。僕は微動だにしない会長に向かって一礼した。そして、顔を上げる途中で会長の胸元にあるバッチが目に入った。

「凄い……」

そのおびただしい数のバッチに、思わず声を漏らしてしまった。目で追つて数えても、二十個以上ある。卒業用件は完全にクリアーしている。流石生徒会長だ。

「バッチのことか？」

「あ、はい。そうですね、目を閉じているのに」

「何、初めて私を見る人間は大抵同じ反応をする。パターンだよ。君の横にいる竜胆あかりも、初めは君と同じ反応をしていた」

「そりゃあそうだ。十個取るのも一苦労だっていうのに、その倍以上なんて考えたこともない。もはやバッチが装飾品のように見える肩から横腹にかけてずらっと並ぶ様子は、幾多の戦場を潜り抜けた歴戦の老兵のようだ。」

「ん？ ちよつと待てよ。竜胆先輩も同じ反応をしたってことは、去年もこうだったってことか。」

「えっと、今年卒業なんですよね？」

「いや、私は卒業しないよ」

「さもそれが当たり前かのように会長は言った。なんとなく予想していたことではあるが、こうして実際に姿として見られるとは思わなかった。」

「バッチを二十個以上取得する意味なんて一つしかないのだ。」

「コクハラくんは特別報酬制度を知っているかな」

「会長、僕は君島——」

「ああーすまない、目が悪くてよく聞こえないんだ」

「意味が分かりませんよ!？」

「やばい。この人も僕をコクハラで通していくつもりだ。」

「特別報酬制度は、卒業用件と同じバッチ十個、それも学年バッチを含まない十個を学園に提出することで、ある程度の無理を学園に通すことが出来る制度なんだが、まあ基本は就職などの推薦文を書いてもらうためのものだ」

生徒手帳に書いてあったことを説明的に会長は述べた。

この龍泉学園では十個のバッチ取得が基本的に最低条件となるわけだが、勿論それ以上を取得することも可能だ。四年間の間に更に十個のバッチを取得した超成績優秀者には、学園側から報酬が送られる。とは言え、どんな無理も通るわけではないために、会長の言

うように基本的には就職活動や進学に使われるらしい。学園に入学する時のプレゼンテーションで超真面目に話を聞いていた僕は、特別報酬制度を利用した生徒の報酬内容を表したグラフを覚えているが、八割がそんな感じだったと思う。

「私はその特別報酬制度を使って、生徒会長になっているんだよ」

「生徒会長に、ですか？」

「そう。今年で生徒会長になって四年目だ」

「なっ——」

つまりそれは、『四年間連続で十個以上のバッチを取得した』ということを意味する。成績優秀者なんてレベルの話じゃない。もはや怪物の類だ。今まで優しそうな先輩だなぁー程度に思っていた会長が、急にただものじゃなく思えてきた。

「一年前に私がここに来た時も、同じことを質問して、同じことを返されたわ。二年前には二十個のバッチを提出して、生徒会長を継続する権利と、そして生徒会室の改装をしたそうよ」

「二十個なんて一年で取得出来るんですか……」

「不可能ではないわ。限りなく不可能なだけであってね」

竜胆先輩が呆れたように言うと、会長はハッハッハ、とわざとらしく笑った。

「あの時は流石の私も死に物狂いだったよ。南の紛争地域に銃器を担いで行ったときは、真面目に自分が何をしているのか分からなくなっただけだ」

「生徒会長に命賭けすぎでしょう!？」

「何、青春とはそういうものだ」

「絶対違う!」

そんな死と隣り合わせの青春があつてたまるか。青春とは無垢な女の子、もしくは少し背伸びした女の子と、そしてぱんつがあつて初めて成り立つものだ。ちきしょう、バッグは教室に置いてきてしまったんだ。あれがあれば、会長に青春とはなんたるかを語ってやるのに。例えば青春には四歳から六歳までの青春と、七歳から十二

歳までの青春、そして十八歳までの青春が……。

「だが、コクハラくんもそういう目的でこの学園に入学した口なのだろう？」

「……まあ、そりやそうですが」

大体、こんな特殊なシステムを取っている学園に入学する理由なんか一つしかない。

「今年も南の方に行く予定だが、一緒にどうだね？」

「丁寧に断ります」

「なあに、死にはしないよ。足の一本でも覚悟すれば、一気にバツチ三つくらいは取得出来る美味しい作業だと思うが」

「だから命賭け過ぎでしょう！？ どこにも美味しい要素ありませんよ！」

「そのくらいやらねば、一年で十個以上を取得することは出来ない」
急に声のトーンを落とし、会長はそう言った。

「どうしてそこまで生徒会長を……」

「誰も出来ないからだよ」

会長の言葉には、先ほどまでの少しおちゃらけた調子は少しも混じっていないかった。

「この学園は、放つて置けば、必ず腐る。だから、私が統治する」
「……」

何も言い返せはしなかった。僕がこの学園に対して思うことが無かったわけではなく、会長の確固たる意思が伝わったからだ。竜胆先輩や神山先輩も「去年は」と学園について苦言を漏らしていたが、それはどうやら冗談で済まされる程度ではないのかもしれない。

「ロングスカートなど、有り得ないのだよ……っ」

「ん！？ 今、何か言いましたか」

何か聞いてはいけないことを聞いてしまった気がする。

「いや、なんでもない。……それで、何か用があつて来たのだろう？」

竜胆先輩のほうに向き直り、会長はそう訊いた。

「彼を、私のサポーターとして登録しに来ました」

「ほう……君のサポーター」

目を開けていないのに、値踏みするような視線を感じた。足の指先から頭のとっぺんまでを隅々まで探られるような、嫌な感覚だった。

「コクハラくん。サポーターとはどういうものなのか分かっているのかな？」

「はい。先ほど竜胆先輩から内容は聞きました」

「ふむ、そうか」

汚物に絡め取られたかのような、ねちっこい、どろりとした感覚。知っている。これは――。

「ちよつと失礼するよ」

次の瞬間。

「――な」

風だった。身体が押し戻されるほどの風を感じた。吹き荒れる風は風ではなく、言うなればオーラ。到底人間が発生させられるものとは思えない、とてつもない威圧感が僕を襲った。

会長が目を開いた。ただそれだけのことだったのに、僕は息を詰まらせ、手足を拘束され、視線を動かせなくなった。宇宙、とでも言うべきなのだろうか。僕はその中に投げ出された。そして数多の星が僕を見つめる。一つ一つが目になる。ぎよろり、ぎよろりと目玉が動き、観察対象を逃がさないと眼差しで威嚇する。身体の震えがとまらない。動悸が激しくなる。苦しい。呼吸はひゅうつと音を鳴らすだけで、本来の機能を失っていた。

怖い、怖い、怖いっ！

「大丈夫か、コクハラくん」

「――」

……帰ってきた、のか？

周りを見渡すと、場違いに豪華な装飾品たちが僕を迎えてくれた。「すまないね。私はどうにも目つきが悪いらしく、人が私を目線を

合わせると縮こまらせてしまうのだよ。だから、普段はいつも閉じている」

「そう、なんですか……」

縮こまらせてしまう、なんてレベルのものじゃなかった。圧殺されかねないぞあれは。

「とは言え初対面の生徒に対してそれは失礼だろうし、私も一度目に焼き付けておきたいのでな。いやしかし、君が竜胆のサポーターに選ばれたというのも分かる気がするよ」

「本当ですか？」

目を瞑っているおかげで普通に話が出る。いつの間にか動悸も治まっていた。額に浮いた冷や汗だけが、先ほどの感覚が事実であった事を如実に語っていた。

「なるほど。こうして見てみると、君は実に美しい顔立ちをしている」

「……は？」

「いかに永結凍土がどのと言われた竜胆あかりであっても、美形男子に弱いという女性的な一面は隠しきれなかったということか」

「いやいやいや！ この人は一体何を言っているんだ。僕が美形だつて？ 冗談もたいがいにしてくれ。年齢〃彼女いない歴の僕が美形だったら、今までの人生はなんだったんだってことになるじゃないか。ほんと、相当酷い人格でも無い限り一人くらい彼女がいた経歴があつても……あ、ぱんつのせいかな。ならいいや。」

「ち、違います！ そんな不純な動機で彼をサポーターにしたわけではありません！」

「そうなのか。じゃあなんだ、何らかしらの技能に長けているのか？ そうは見えなかったが……」

第一印象は無能つてことですかそれは？ 竜胆先輩といい、なんかこの学園の先輩方は後輩に対して厳しくないですか？

「その、彼がどうしても言うので仕方なく」

「嘘だッ！」

僕は自分でも驚くくらい速く、その言葉に反応した。今のは聞き捨てならない。竜胆先輩は目線で「空気読め」的な意思を僕に送り込んでくるが、そんなもの構うものか。ここで彼女の言葉をスルーしたら、必死に頑張ってくれた僕の身体に申し訳が立たない。

「先輩が僕に頼んできたんじゃないですか！ 見てくださいこの青痣を！ 先輩とのやり取りが嘘ではない事を証明してくれています！」

そう言っ僕は左腕の袖を捲り上げた。先輩に掴まれたところが青くなっている。改めてみると結構エグいなこれ。掴まれただけなのに。

「なるほど、これは酷い。竜胆、本当に君がつけたものなのか？」

「違います」

しらつと嘘をつくなこの人！ なんでそこを頑なに認めようとなないんだ。

「会長、彼が無類の、その、し、下着好きだというのはご存知でしょうか」

「ちよつと！？ なんで人の好みを勝手にカミングアウトしちゃってるんですか！」

下手すりゃ社会的に抹殺されかねない趣味なのにつ！

「君島幸一、それは本当か？」

「本当です！」

嘘をつく必要なんて僕には無かった。何故ならそれが僕だったから。

竜胆先輩がまるで何らかしらの被害にあつたかのような、たどたどしい口調で話を進める。

「彼の青痣は、自らの腕に下着を巻きつけて出来たものです。昼間会った時に見ました」

嘘の飛躍度が天を突破していた。どういことですか、腕に下着を巻きつけるって。流石の僕でもそんなことはしな——いと言えるのか？ いやしないよ。

しかし、考えてみるとこの青痣は本当に竜胆先輩につけられたものなのか分からなくなってきた。確かに、直接この腕に手を下したのは彼女自身の握力に違いない。僕はあの痛みを確かに覚えている。だが、事の発端を追えば、その原因とはぱんつでなかっただろうか。白のぱんつをたまたま入学式の日に見てしまったがゆえに、僕は今こうして先輩と共に生徒会室にいる。青痣はその過程だ。黒のぱんつをはいた先輩が僕に仕返してもしようと思っているというのならば、そう、これはぱんつに噛み付かれたようなものだ。白のぱんつが僕という存在に観測された事に腹をたて、自らを黒に変色させ、僕に襲い掛かってきた。そう考えれば、この青痣はぱんつによって出来たものと解釈しても問題ないように思える。

自業自得。まさにこの言葉が似合うだろう。

そうか、そこまで先輩は考えて発言したのか。幾ら僕でも考えが至らなかった。やはりぱんつを愛するものとしてまだまだ精進が足りない僕は……。やはりぱんつは女性のほうが理解が深いのか。竜胆先輩、また一つあなたを神として崇めたくなる要素が増えました。

「会長、確かにこの青痣は、僕が自分の責任でつけてしまったものでした。今、先輩に気づかされました」

「そうか。自分の否を認めることは良いことだ」

「ですが、サポーターは先輩から誘ってきたんです。それだけは信じてください」

「君島くんっ！」

先輩が何か言っているが僕には聞こえなかった。照れ隠しか何だか知りませんが、僕に責任を押し付けるのはやめていただきたい。スカート捲りますよ？

「そうか。竜胆あかりが、自分から申し出を、ね。興味深い話だが、それはまた今度にしよう。こちら仕事が終わっているの。さっさと済ませてしまおう。君島幸一が正式なサポーターとして活動出来るよう、名簿に君のサインが欲しいのだが……はて、名簿帳を

どこへやったか」

目を瞑ったまま机の上を見渡したり、引き出しを開けて確認している。のぞみこのみ見えてるのそれ。

「希木実！ 名簿をどこへやったか知らないか？」

会長は、引き出しを覗き込みながら誰かの名前らしきものを口にした。しかし、生徒会室には僕ら三人しかない。暗号が何かだったのだろうか。と、僕が首をかしげていると、横から竜胆先輩が、

「副会長の名前よ」

親切にもそう教えてくれた。のはいいが、当の副会長の姿が見えない。大理石の床がいちいち目に痛い生徒会室を見渡しながら探してみたが、やはり見当たらない。見渡しだけはやたらと良いので隠れるスペースもない。

そう思っていたら、会長の座っているチェアの横から、すつと手が伸びて、会長に一枚の紙を手渡した。

そこにいたのか。全然気づかなかったっていうか、なんでそんな微妙な空間にいるんですか。

「おお、ありがとう。何々、『バウムクーヘンが食べたい』。なるほど、それはともかく審判員選挙立候補者の名簿帳を知らないか？」
また一枚の紙を持った手が後ろから出てくる。

「『早く買ってこいよこのクズが。人が目の前にいるからっていい子ぶってんじゃねーぞ』と。ふむ、困ったね。あまり生徒会室で飲食をしてもらいたくないのだが、致し方あるまい」

ため息をつくと、会長はデスクの中から菓子箱を取り出した。マジックか何かで『バウムクーヘン』と書かれている。それをチェアの後ろに差し出した。すると、数秒後に入れ替わりに紙が会長に渡される。

「『目の前』。おお、これか。ありがとう希副会長」

後ろから「任せろ」とでも言いたげに親指を立てた手が飛び出してくる。なんなんだこの副会長。

「っていうか目の前って本当に目の前じゃないですか！ デスクの

上のド真ん中のものを探すなんて聞いたことないですよ！」

「すまないね。目を閉じていると色々不便で仕方がない」

結構深刻な悩みらしかった。

会長は名簿を開くと、後ろから何ページか指で数えているのだろう、ゆっくりとページを捲りながら、あるところで止まった。そこには、今年審判員に立候補した人たちの名前が載っている。竜胆あかりという名前は勿論のこと、神山先輩の名前もあつた。意外と立候補者は多く、パツと見ただけでも十名は超えている。人気のない役職だと思っていたが、競争率は結構高そうだ。立候補者の名前の横に、幾つか欄がある。そこにサポーターの名前を書き込んでいるのだらう。一人につき、平均三人くらいだらうか。神山先輩の欄だけ枠内に収まりきっていない。言うまでもないが竜胆先輩の横には誰の名前も無かった。

「ここに名前と学年を書いてくれ。君の直筆で頼む」

「判子とかはいらないんですか？」

「直筆で、といっただらう。それが直接君島幸一という生徒の証明になる」

筆跡鑑定でもするつもりなんだらうか。相変わらずよく分からない生徒会だった。

僕は竜胆先輩の横に、『君島幸一』としっかり書き込んだ。決してコクハラとか不名誉な名前を残さんと、筆圧強めで。

「ありがとう。ふむ、これは、君島幸一コクハラと読むのかな？」

「違いますよ！？ 一体どういう読み方したらそうなるんですか！ちよつと、振り仮名振るのやめてください」

生真面目に振り仮名を振ろうとしていた会長を止める。冗談じゃない。名簿までコクハラの名前で通ってたまるか。

「ははっ、ユーモアだよユーモア」

人のあだ名で遊ぶのはユーモアなんでしょうか。

会長は名簿を閉じて横に除けると、僕と先輩を順に見てから言った。

「さて、これでサポーター登録は済んだよ。このバッチを受け取れたまえ」

会長が引き出しから、竜胆先輩と同じグレーのバッチを僕に渡してきた。丸い形に「サ」と書かれた単調なものだったが、僕にとっては記念すべき二つ目のバッチだ。恐らく先輩のバッチと同じく仮のものなのだろうけど、僕はほかのクラスメイトより一歩前に出られたことで、素直に嬉しかった。

「君島幸一と竜胆あかりが審判員、サポーターの関係であることを表すものだ。仮バッチだが、見事審判員に当選すれば金色のバッチに変わって真に君のものとなる」

「あ、ありがとうございます」

「精進してくれたまえ。明日から良く励むように」

「ありがとうございます」

竜胆先輩がお辞儀したのを見て、僕も合わせておく。

用は済んだのか、先輩はそのまま別れの挨拶を適当に済ませて、身を翻した。僕も一礼した後、彼女の摩く黒髪を追った。

「君島幸一」

不意に、会長に呼びかけられた。振り返ると、会長は目を開けて僕を射殺するような視線で見っていた。槍で撃たれ、繋ぎとめられたかのように、僕はまた動けなくなる。

「竜胆あかりが、この生徒会室に誰かを連れてやってきたのは、君が二人目だ」

「どういう、ことですか」

腹の底から搾り取るように力を入れると、ようやく声は出た。

「期待しているよ、ということだ」

すっ、と刺されていた槍が抜かれ、底に溜まるような重圧から開放される。会長が目を閉じた。荒い呼吸を抑えながら、僕は会長を見据えた。チエアーの後ろから副会長らしき人の手が『ガンバ!』と書かれた小さいホワイトボードを僕に向けていた。案外いい人なのかもしれない。会長は僕への興味を失ったかのように、手探りで

出した書類を片付けている。どうやって書類ものの仕事やっているんだあの人は。

期待されたというのは、素直に喜べば良いのだろうか。どうにも裏があるような発言に聞こえたが、僕の考えすぎだろうか。それに二人目って。竜胆先輩は以前、僕以外の誰かを連れてここにやってきたことがあるということだ。あの、竜胆先輩が。

扉の前で僕を苛立たしく待っている先輩を見る。カツカツ、と靴を鳴らし僕を急かしていた。……あの人に友達がいたとかあんまり考えられないとか言ったら絶対殺されるよね。

「扉を開けなさい。サポーターでしょ」

僕がそこまで辿り着くと、突然先輩はそんなことを言い放った。どこかのお嬢様ですかあなたは。とは言え重そうだったので、僕は身体全体を使って扉を開けた。

目に映りこんだのは久々と感じてしまう校舎の光景。夕焼けが廊下に差込み、黄昏時のなんとも言えない憂鬱感を演出していた。カラスの鳴く声でも聞こえたら、ここに座り込んでのんびりしたい気分だった。

しかし、実に長く感じる一日だった。昼休みは潰されるし放課後は気疲れするほどの眼力をお持ちの会長と顔を合わせるし、相変わらず竜胆先輩は傍若無人というか、遠慮を知らないし。

ああ、早く帰ってぱんつの研究でもしたい。今の課題は竜胆先輩のために選ぶ七種類のぱんつを選ぶことだった。今日一体何色のどんなぱんつをはいているのか分からないが、少なくとも僕の心がときめいていないので正常な判断によって選択されたものではないのだろう。あの入学式のときの感動を僕はもう一度味わいたかったのだ。

だが、ここで甘えてはいけない。白のぱんつをはかせればいいじゃないかなんて意見は言語道断だ。日によって女の子のぱんつの質は変わる。人の気持ちとは常に変動し、一日たりとも同じ日が無いように、ぱんつも同様なのだ。

ブルーな気分の中にはくもの。嬉しい時にはくもの。雨の日にはくもの。晴れの日にはくもの。細かく分ければもつと状況はある。

例えば、今の竜胆先輩に似合うぱんつは何だろうか。あまり明るい色ではないし、セクシー系も今日の気分ではないだろう。なるだけ簡素で、なおかつ白に近いベージュなどが良いんじゃないだろうか。ゆつたりとした、お尻全体を包んでくれるくらいのローレグがいかもしれない。うーん、悩ましいね。

そんなことを妄想しながら空を見上げていると、

「あつ、コクハラくんじゃん！」

と聞き覚えのある声が僕を現実に戻した。ポニーテールを揺らしながら近づいてくる神山先輩だった。僕の正面まで来ると、ぶいつ、とピースを作った。いや何が。

「どうしたのこんなところで？もしかしてあたしを探してた？」

小悪魔的な表情を見せながら僕にそう詰め寄った。

「そんなわけないじゃないですか。正しいぱんつをはけない人に興味はありません」

「えっ、何、あたしのパンツ見たいの？」

「はいっ！」

好物のえさがつけられた釣り針をスルーするほど、僕は進化した人類ではなかった。生物とは敵から身を護るために、常に環境に順応するものだ。黒き邪神Gでさえも、何度も同じ罠に引っかかる馬鹿ではない。過去の経験から危機を察知する力。ことぱんつにおいてはそのセンサーは働かないように設定されています。あれ、今の話、暗に自分がゴキブリ以下ってことにならないか？

「ふふっ、良いけど、条件があるなあ」

スカートの裾に手がかかる。僕はごくり、と生唾を飲み込み、スカートに穴が開くくらい目を凝らした。

「じよ、条件？」

「あたしのサポーターになってくれたら——」

その瞬間、僕は後ろに大きく引つ張られ、思わず体勢を崩した。

代わりに長い黒髪が僕の前に躍り出た。

「相変わらず、人に媚び諂って生きるのが得意ね、樹」

険しい顔で神山先輩を睨み付ける竜胆先輩だった。神山先輩も嫌なものでも見たかのようにしかめっ面になり、手をかけていたスカートを手放して大げさにリアクションを取った。

「ああ、あかりじゃん。いたんだ？」

「いたわよ。それより、人のサポーターにちょっかい出すのやめて貰えない？」

「人のサポーター？」

神山先輩が僕の胸元を覗き込む。そこには先ほど会長から貰ったグレーのサポーターバッチが輝いていた。

「なるほどね。そうなるとは思ってたけど、やっぱり抱え込んだんだ」

「どういうことよ」

「だって、あかりのサポーターになってくれる人なんていなかったんでしょ？」

まるで挑発するような口調。ヤバイ、と思った時には竜胆先輩は神山先輩に掴みかかっていた。怒りの形相。止めようとした僕の足がすくむほどだった。しかし、当の神山先輩は飄々とした感じで、拳句の果てには笑っているようにも見えた。

掴み掛かったまではいいが、竜胆先輩はそのまま一言も発さずに神山先輩を睨み付けているだけだった。

「……言い返さないんだ？ ううん、言い返せないんだよね。だって凶星だもん」

「黙りなさい」

「黙れって？ いつまでそうやって人を威圧するようなことしてんの？ だから周りに誰もいなくなっちゃうんだって、まだ分からないんだ？」

「黙りなさいっ！」

廊下に怒声が響き渡る。思わず耳を塞いでしまうほどの迫力に身

を縮こまらせた。

一触即発。

竜胆先輩の口ぶりから、なんとなく神山先輩とは知り合いのような気はしていたが、なんだこれは、まるで犬猿の仲じゃないか。売り言葉に買い言葉じゃないが、神山先輩もわざと彼女を刺激するような言葉選びをしているんじゃないかと疑ってしまうくらい、酷く挑発的な言葉をぶつける。竜胆先輩の我慢が利かないのは今更だが、こうして怒っている姿を見たことが無かったので、僕はビビッて動けずにいる。

「樹にだけは言われたくないわ。私のことなんて何も分からないくせに」

すると、今まで余裕を見せていた神山先輩にひびが入った。酷く傷ついたように表情を曇らせると、さっきまでの挑発的な口調から打って変わって、静かに、囁くように言った。

「そういうこと言うんだ。悲しいな、それは」

「――っ」

弾かれたように竜胆先輩が神山先輩を突き放した。ふらつとしながらもきちんと二本の足で立つと、神山先輩は曇りガラスのような瞳を携えてこつちを見据えてきた。少し乱れた制服を直そうともせず、まるで竜胆先輩がしたことを僕に見せ付けるかのように、静かに立っていた。

「あたし、絶対に当選すると思うよ」

断定。自分に絶対の自信を感じ取れる言葉だった。そして、それを憶測でも否定できる人物はこの中にいなかった。彼女の人気、彼女の知名度、彼女の意思、彼女の成績、どれを取っても突っ込むべき場所が見当たらない。目の前の生徒は、選挙という場において凶悪なアドバンテージを有している。当選するための、無類の強さを持っている。

「だからさ、コクハラくんもあたしに付けば、そのサポーターバッチ、絶対に本物にすることが出来るんだよ。どう？ そんな無愛想

で威圧的な女なんか捨ててさ、あたしのここに来なよ。そっちのほうがいいって」

「樹っ！」

竜胆先輩が悲痛な面持ちで声を上げた後、泣きそうな顔をして見えた。神山先輩が曇りガラスなら、竜胆先輩はさながら豪雨に耐え切れず、割れそうになっているガラスだった。やっぱり、永結凍土なんて嘘だ。こんな顔を向けられてまだそんなことが言えるやつがいたら僕の前に連れて来い。ぶん殴ってやる。

「何度も言うように、僕は神山先輩のサポーターにはなりませんって」

「どうして？ 私のことなんて分からないくせにつ、とか言っちゃう痛い子だよ？ いっつもむすつとしてて、自分のことばっかで、超ウザい子じゃん」

「僕は別にそうは思ってませんから」

「……へえ」

反応が意外だったのか、驚いたように目を丸くした。

僕は知っている。入学式の際に見た竜胆先輩が、本当の彼女だということを知っている。だから、殴られようが罵られようが、僕はそうして断言する事が出来る。

「竜胆先輩は不器用なだけです。宣伝の日に黒いぱんつをはいてしまつくらいなんですから、ほんと不器用です」

「ちよつと君島くんっ」

赤面して恥ずかしがったかと思ったけど力いっぱいぶん殴られました。軽く吹っ飛んで廊下の壁に叩きつけられ、僕は脱力して崩れ落ちた。今のは少しだけ故意だったので彼女を攻める事は出来ない。「見せ付けちゃってくれるねえ、コクハラくん。その優しさ、あたしにも分けてくれないかな？」

神山先輩が中腰になって地面に這いつくばる僕を見下ろした。制服の胸元から美しい鎖骨が姿を現し、思わず目を逸らした。下のほうはどんとこいなのだが、上のほうにはめっきり耐性のない僕であ

る。

「僕をコクハラとかいうよくわからない名前で呼ぶ人に与える優しさはありません」

「そうなの？　じゃあ今からコーイチくんって呼ぶ」

「やめてください！　なんかむず痒い！」

いやなんでむず痒いんだ。僕のれっきとした名前じゃないか。何か今まで土足で踏み入られてきた名前というプライバシー空間に、突然靴を脱いで新品の靴下で入ってこられたような感覚だった。よくわからない。

「ねえあかり。勝負しない？」

数秒僕を見つめたかと思うと、突然そんなことを言い出した。

「勝負？」

「そ。コーイチくんを賭けて、あたしと勝負しようよ」

こーいち？　なんだっけそれ。凄く聞き覚えのある言葉なんだけど、よく思い出せない。

「どうしてそこで君島くんが出てくるのよ」

ああ君島くん。君島って僕じゃないか。

え、僕っ！？

「僕を賭けるってどういうことですか！」

「あたし、本格的にコーイチくんが欲しくなっちゃった」

「ひいつ」

ドキッとするようなことを言われたはずなのに、舌なめずりをし妖艶に微笑む神山先輩を見た途端、恐怖に変わった。狩猟者の目だ。ちろっ、と唇の上で蠢く赤い舌はまさに蛇そのもの。僕は狙いを定められた獲物のごとく、ただただ狩られる瞬間を怯えながら待つしかない、惨めな存在になった気分がした。

「勝負の内容を聞かせて」

「えっ、受けるんですか！」

「樹からの挑戦を跳ね除けるなんて、逃げてるみたいで嫌だもの」
てつきり「意味が分からないわ」みたいなことを言っただけで断ると思

つてたのに！　ディーラーの前に出されるチップには意思などない
とでも言うように、僕はいとも簡単に賭けの対象と化した。

「そうこなくっちゃ。内容は簡単、審判員選挙での票数。これで勝
敗を決めるってのはどう？」

「それは……」

突きつけられた内容に、竜胆先輩は瞳に迷いの色を浮かべた。

無謀。その言葉がよく当てはまる勝負だ。その条件を突きつけた
神山先輩を卑怯だと罵っても問題ないくらいに、それは神山先輩側
に有利な勝負の内容だった。彼女が先ほど自分で言ったように、僕
から見ても神山先輩の当選はほぼ確実だと思われる。相当酷い事件
でも起きない限り、それは揺るがないだろう。そんな相手と票差を
つけ、勝たなければならぬ。馬鹿らしい。ゴールテープ手前にい
る相手をスタートラインから抜き去るくらいの難易度。クソゲー過
ぎてワゴン行き決定だろう。

僕はふざけるなと声を荒げてやりたくなかったが、

「受けるわ」

という信じられない言葉に遮られてしまった。

「へえ、受けるんだ。本当に良いの？　分かってる、自分の言っ
ていることの意味？」

僕が思ったことは、そのまま神山先輩が代弁してくれた。

「何度も言わせないで。受けるって言ってるでしょ」

竜胆先輩を見て、僕は絶句した。

意思が無い。激流に流されながら、はたから見ている人には「泳
いでいるの」と言い放つような、不安と嘘だらけの酷い顔をしてい
た。隠そうとしても隠し切れていない不安。自分の意思で泳いでな
んでいない。プライドから出た強がり、泳いだふりをして、必死
に取り繕うだけの惨めな格好。泳いでいるのは目のほうだ。後悔す
る前に今の発言を撤回してください。この賭けが少しでも無謀だと
思うのなら、今すぐに撤回してください。そして、自分に有利にな
るような条件を提示して、冷静に勝負を見極めてください。

「分かった。じゃあそういうことで交渉成立ね。もう待ったは聞かないから」

「そんなことしないわ」

「そ。明日広報部がアンケートで取った途中結果を掲示板に掲載するらしいから、授業が始まる前にも見ると良いよ。自分で言っておいてなんだけどさ、正直受けるとは思わなかった。流石のあかりもそんな馬鹿じゃないって思ってたけど、違ったね。掲示板見て、反省すると良いよ」

「忠告どうも。何か用事があるんでしょ、早く行けば？」

「そうさせてもらうよ。じゃ、コイチくんもバイバイッ！」

言って、神山先輩は風のように去っていった。

取り残された僕と竜胆先輩は、互いに気まずい空気でした。しばらくその場を動けなかった。正直、僕は竜胆先輩が謝ってくれるんじゃないかと、そんな淡い期待を抱いていた。勝手に決めてしまってた。ごめんさいねとか、少し無謀だったかもしれないわとか、そういう言葉は待っていて、だから僕はずっと黙っていた。

でも、僕が一人で立ち上がるまで、彼女はたったの一言も口にしなかった。顔を合わせようとしなかった。最後に神山先輩に言い放ったものも、きつと顔を合わせていられなかったからだろう。

大分暗くなってきた夕焼けが、竜胆先輩の横顔に影を作っていた。僕は眩しいほうに視線を向けながら、「帰りましょう」と提案した。「先に帰って良いわよ。私はまだやることがあるから」

「選挙関係ですか？ だったら手伝いますけど……」

「テスト関連よ。一等生の君島くんに手伝える事はないわ」

「そうですか……」

テストなんて、ずっと先なのに。もう勉強し始めるんですか。

「分かりました。先にお暇します。明日から頑張りましょうね」

「ええ……」

声に力が無い。明らかに意気消沈している先輩に対して、段々と怒りのようなものが湧いてきた。せめて、せめて空元気でも良いか

ら自信満々でいて欲しい。既に負け戦を体験しているような顔をしてないで欲しい。

僕は背を向けかけた身体を元に戻し、声を低く抑えて言った。

「やるからには、勝ってくださいよ。僕は神山先輩が苦手なんです。彼女のサポーターになんかなったら、一体どんなことをされるか分かったもんじゃありません。だから僕は全力で先輩をサポートします。何かあったら言うてくださいね」

「分かってるわよ」

ほんの少しだけ色の混じった声で返して、先輩は小さく頷いた。

校舎を後にする。外から暁色に染まった校舎を見上げ、さっきまでいた生徒会室前を探してしまった。僕も僕で、先輩のことは言えないのかもしれない。

本当は言ってやりたかった。

あなたはどんな勝算があつてこの勝負を受けたんですか。一体何割の確率を信じて神山先輩に対抗しようとしているんですか。それとも。

僕があなたのサポーターでなくなっても、別に構わないと思っ
ているんですか、と。

3話

そもそも、だ。

竜胆先輩が受けた勝負には、大事な前提が一つ欠けている。

審判員選挙に当選すること。およそ神山先輩の当選が確実だとし
て、あの勝負では竜胆先輩の当選が最低条件となってくる。まず、
この第一関門を抜けることから始めなければならないのだが、これ
が非常に難しい。方やアドバンテージ、方やハンデを背負った勝負
と言っても過言ではない。この落差をどう埋めるか。神山先輩以外
の立候補者も沢山いるのだ。まず、その人たちより票を集めなけれ
ばならない。

しかし、知つての通り竜胆先輩のイメージはほとんど最悪だと言
つても過言じゃない。あのクラスでの宣伝を見ていれば嫌でもそう
思われる。イメージが全てとは言わないが、竜胆先輩が選挙にお
いて有利なものを持っているとすれば、七つというバツチしかない
だが、それは一般生徒にとっては「すげえなあの人」くらいの印象
しか与えられず、逆に堅物なんじゃないかというマイナス要素すら
生んでいる。つまり、どこを取っても絶望的だということだ。

神山先輩と竜胆先輩は、同じ土俵に立ってすらない。そのこと
を深く思い知らされたのは、昨日神山先輩が言っていた掲示板だっ
た。

登校すると、正面玄関を入ってすぐの掲示板のところに人が群が
っていた。下駄箱は全校生徒のぶんが統一されている。教師用の下
駄箱は別の入り口にあるが、それを除いても相当の数の生徒がこつ
た返しになる。それが一同に集まっているのだから、アイドルグッ
ズの限定販売かと勘違いしてしまうくらい人ごみが凄かった。

掲示板前の人ごみを見たとき、期待というよりは不安のほうが大き
かった。正直に言つて、このまま素通りしてしまおうかと考えた。
人ごみを掻き分ければ、竜胆先輩の選挙における現状が見える。や

はり、覚悟しておくべきなのだろうか。

「よう、コクハラ。凄い人ごみだな」

下駄箱で右往左往していた僕の肩に、誰かの手が置かれた。振り返ると、イケメンスマイルを浮かべた翔悟くんの姿があった。

「何かやってんのか？」

「審判員選挙について、広報部がアンケートを取ったらしいよ。投票の途中経過みたいなものじゃないかな」

「へえ、じゃあ見に行こうぜ。樹先輩、どんくらい票入ってんのかな」

翔悟くんは僕とは逆に、生徒の波に乗るように突撃していった。

僕もそれに引つ張られるように続いていく。

掲示板の前まで辿り着いてしまった。広報部の作った学内新聞は、『審判員選挙、気になる中間結果は？』という見出しで飾られ、一面に候補者の顔と一緒にアンケートの結果が載せられていた。アンケートは宣伝前のもものらしい。僕のクラスにもその類のアンケートが回ってきたような気がするが、特に意識もせずに竜胆先輩に入れた気がする。

棒グラフで纏められたアンケートは票数の多い順に並んでいる。

一番左側が最も多い票を獲得した人物。見なくても分かる。一位は神山先輩だ。いつもの明るい先輩とは違う、選挙に真剣さを感じさせる写真が掲載されている。なるほど、こういう先輩も悪くない。

と、そう間抜けに顔を緩ませたのも一瞬。僕はその下にある票数を見て凍りついた。

「六七〇票……」

学園生徒数は何人だったか。急いで胸ポケットから生徒手帳を取り出し、生徒数推移と書かれている項目を見る。今年の分もきちんと書かれている。自慢じゃないが、生徒数のことが生徒手帳に載っているのと知っているのは、重要役職の生徒じゃない限り僕くらいじゃないだろうか。

全学園生徒数、九〇〇人強。思わず、生唾を飲み込む。

二位以下の立候補者の中で、一〇〇票以上を獲得しているのはたった一人しかない。十人以上が立候補している中で、この結果は神山先輩のワンマンショーと言っても過言じゃない。

こうなってくると、気になるのは竜胆先輩だ。僕は左から右に目を走らせていくが、中々その姿を目にすることが出来ない。四位でもない、五位でもない、六位でもない。そうして一人一人を追っていく、票数が減っていくのを目の当たりにしながら、最後の最後で彼女の名前を見つけた。

「七票……」

立候補者中、唯一の一桁。

ある程度予想はしていたことだが、あまりにも低い数字に頭がくらったとした。知名度は決して低くないはずの人物だ。二等生の時点でバッチ七つというのは異例の数で、優等生として彼女は名前を知られていてもおかしくない。だが、この数字が本当だとするならば、知名度とは真逆に、イメージは最底辺を走っているみたいだ。むしろ、七票という数字に喜ぶべきなんだろうか。僕以外の誰も支持していない。そんな状況では、流石にひっくり返す事は不可能のように思う。

「大変だな、お前」

翔悟くんが気の毒そうに肩を叩いた。

「そのバッチ、竜胆先輩のサポーターになつたらいいじゃんか」

「ああ……」

そういえば、サポーターバッチ貰ったんだっけ。胸元に光るグレイのバッチが、とてつもなく重い存在に思えてきた。

「まあ気にすんなよ。まだ宣伝期間あるし、審判員になんのは何も一人じゃねえんだから、樹先輩の票数を超える必要はねえんだしさ」そう。単純に審判員になるだけなら、二位の人を超えれば可能性は出てくる。百票集める事が出来れば、神山先輩と大きい差こそ開けど、目的は達成出来る。

だが、今回はそういうわけにはいかない。このおよそ一〇〇倍と

いう眩暈のする票差をひっくり返さなければ、僕は神山先輩のサポーターとして四年間こき使われてしまうのだ。

「いや、大丈夫だよ」

自分を鼓舞するように、僕はそう口にした。

「四〇〇票だ。それだけ神山先輩から奪うことが出来れば、僕らは勝つことが出来る」

「何言ってるんだお前？ どう考えても無理っしょ」

翔悟くんが言うことは全面的に正しい。でも、だからといって、

「諦めたら、そこで試合終了だよ、翔悟くん」

「まあ、お前がそう言うならそれでいいけどさ」

ネタは華麗にスルーされました。もしかして読んでないの？ やばくない？

とは言ったものの、二十二点差どころか六百点差以上つけられている試合に勝つのはあまりにも容易じゃない。どんなに綺麗な言葉を吐こうが、この試合、勝てると思ってるのは誰もいないだろう。ぶっちゃけ僕も勝てるとは思っていない。昨日はどうにかしてやろうと勝負熱に浮かれていたが、こうして現実を目の当たりにすると冷水をかけられたごとく一気に熱は湯気になって空に消えていってしまった。

神山先輩は、ぱんつさえ見えぬ高見台の上にいる。どれだけ雑種の布を積み重ねても恐らく届かない。唯我独尊、我が物顔で小さく小さく纏まってしまった竜胆先輩の土台では、彼女のぱんつを評価する事さえ出来ない。実に絶望的だった。

「それよりさ、俺のこと見て何か気づかないか？」

「ん？ 髪の毛でも切ったのかい？」

そうだとしたら男にそんなことを聞く翔悟くんは相変わらずイケメンながら残念な性格をしているものだ。と涙の一つでも流したものだ。どうやら髪の毛ではないらしい。耳につけている丸いピアスかと思ったがいつもの通りだし、普段と変わらないただのイケメンだった。嫉妬心に焼かれて死にそうになる事にはもう慣れました。

「これだよ、これ」

胸元を指差した。見ると、若葉マークのバッチ以外に、「サ」と書かれた非常に見覚えのあるバッチが付いていた。サポーターバッチ。しかも、オレンジ色。

「神山先輩の、サポーターバッチ……？」

「そーなんだよ！ 昨日な、神山先輩に呼ばれて、生徒会で貰ってきたんだ」

自慢げにそれを見せ付けてくる。

昨日ということは、あの一件があった後だろうか。先輩は翔悟くんのサポーター登録に行っただってことだ。翔悟くんとは微妙にすれ違っていたらしい。

「サポーターってどんなことするんだろっな。想像するだけでも興奮してくんぜ」

「いや、何か雑用とかそういうのばかりだったような気がするよ」

「雑用やらされんのか。うっひょー、それもいい感じだぜ。こう、高いところにあるものを取ろうとした先輩がふらっと俺に倒れてきて、俺がそれを見事に受け止めるんだ。そしたら、そしたら」

僕はその光景を想像する。超イケメン男子と学園一の美少女の接触。それは、とても絵になる光景で――。

「胸が揉めるかもしれないっ！」

「超即物的だな君は！」

指をいやらしく動かすんじゃない。

「ノーブラ、ありえるぜ」

「ないよ！」

「絆創膏派なのかコクハラは。まあ気持ちは分らないでもねえけど、俺はやっぱ生のほうが良いと思うんだ」

「何の話をしているんだよ！ どんな漫画の世界だそれはっ！」

「やっぱりコクハラはブラジャーには興味ねえのか。女が選ぶのはパンツだけじゃねえぞ。そこところは良いのかよ、コクハラ」

「ぬ――」

確かに一理ある。ぱんつとはぱんつでしかないが、下着という一括りをすれば、ぱんつとブラは同一の存在と化す。同じ身を護りつつ、女性の魅力を引き出すアイテムだとするならば、確かに僕の数多のぱんつ理論はブラのほうに適応されてもおかしくはない。

だが――。

例えば僕の右隣で掲示板を呆けた顔で見ているボケていそうな童顔の女生徒。左肩にうつすらと浮き上がるブラジャーの線とその色を見る限り、駅で三つほど先にあるランジェリーショップで買った1780円の上下セットだろう。色は黒と赤のラインが引かれた中々に大胆なものだが、厚みがかなりあるものだ。見る限りバストサイズはD前後。多分バストに合っていない。かなり過ごしくそんなブラジャーと言えるが、その実、ぱんつはどうだろうか。ヒップの形までは想像しがたいが、先ほどから彼女の動向を見ている限り、ふともも周辺に違和感を感じてはいないようだ。一見して適当に選んだような下着の選択だが、ぱんつはきちんと彼女の一部分として機能を果たしている。では何故、ブラジャーには違和感を感じるのか。それは、人間が上より先の下をはいてしまうという習性があるからだ。つまり、ぱんつをはいた後にブラジャーをつける。ぱんつで着心地の悪くなかった今回の黒赤ストライプだが、そのセットで買ったブラジャーはなんとも言い難い。しかし、上と下の色を全く違うものにしてしまつては、折角のデザイン性が損なわれるだろう。ここで、ぱんつを脱いでほかにすればいいものを、彼女はそのままブラジャーをつけた。それは、単に面倒くさかったという一言で表してしまえば最後だが、彼女にとって「そういう気分だった」という解釈に辿り着かないだろうか彼女は、どうしてか黒赤ストライプのぱんつを脱げなかった。そう、今日という日は、黒赤ストライプの日だったのだ。

このように、ブラジャーとぱんつでは似て非なる価値観が生まれる。やはり、僕の考えはぱんつでしか適応出来ないようだ。

と、翔悟くんに話したら星でも降ってきたような輝いた瞳で「や

「つぱりお前は最高だ」と褒められた。

ガン見していた隣の女生徒からはこの世の汚物でも見ているかのような視線を受けた拳句、僕が結論に達した瞬間悲鳴を上げられた。正直反省している。だが後悔はなかった。

昼休み。午前中に先生から厳重注意を受けた僕は满身創痕で授業を受けきり、クラスメートの殺意にも似た視線と時折聞こえる毒物のようなささやきに耳を侵されながらようやくこの休息のときを迎えた。暴力よりも恐ろしいものはこの世に幾らでもあると思いました。

「モテモテだな、コクハラ」

「君にだけは言われたくないことだよ」

「モテモテだな、コクハラ」

「言われたくないって言ってるじゃん!？」

繰り返しネタとかどこで覚えたんだよ翔悟くん！僕は悲しいよ！君だけは、君だけはまともな変人だと信じていたのに。

「これで僕にラブレターの一つでも届けば素直に受け取れるけれど、きつとくるのは殺害予告か呪いの手紙、迷惑目的のチェーンメールくらいだよ。脱ぎたてのぱんつなんて、誰も僕に送ってきやしない」

「脱ぎたてのパンツ貰うくらいだったら自分撮りのエロ写真のほうがいいわ俺」

「本当に現物主義だね君は！」

出会い系サイトとかに登録してそんな人だった。

昼ごはんの卵焼き丼を食べていると、ちまちまと教室に審判員選挙の宣伝に生徒が来る。宣伝は自由にやっていいので、何度でもクラスを回る事が出来るらしい。とは言え、二度来てもあまり効果は望めないと思うが。顔を覚えてもらう目的だろう。神山先輩も今日は来ない。一度回れば彼女の場合十分だからだ。

「やっぱり、このクラスも神山先輩一択なんだろうか」

「さあな。でも、六七〇票だろ。全員アンケートで樹先輩を選んでもおかしくはねえよ」

「だよね……」

六七〇のうち四〇〇を奪う。その道のりで、このクラスの十人以上が竜胆先輩に投票するということがある程度必要になる。こうしてクラスの面々を見ていると、それが絶望的に思える。神山先輩が来たときの盛り上がり様。ひっくり返せるのだろうか。

不安が首をもたげてきて、箸も止まりつつあったそんな時。

スパーン！ と叩くような音が鳴ったと思えば教室のドアが開いた音だった。デジャヴじゃない。前にも同じ事がありました。

「失礼します」

眼鏡をくいつと上げた竜胆先輩が、教室中を射殺するような視線で見渡し始めた。今回は雰囲気の比喻でもなんでも無く、マジで殺されそうだった。黒い殺意のオーラが彼女の背中から伸びている。ターゲットを捕らえようと、一切の隙がないように蠢いていた。ていうかぶっちゃけ僕しかないだろ、このクラスに用とか。

僕は死への恐怖という人間あるべき感情を持って視線を必死に逸らしていたが、ズドンッという太古恐竜という生き物が存在していた時代をテレビで特集していた時に聞いた効果音のような音で、つい後ろを振り返ってしまった。

さようなら現世。こんにちはぱんつ。あれ、悪くないかもしれない。

「質問したいのだけど、いいかしら」

「ど、どうぞ」

「あなたは君島幸一くんの本物で間違いないのよね？」

「なんですか本物って！」

「いえ、もしも偽者だったら殴ってしまった時に申し訳ないから。で、本物で違いないの？」

偽者がいる前提で話しているのは何故だろう。倒錯しているんだねきつと。というか、まるで僕が本物だと打ち明けたら殴るみたい

な言い方だったんだけど、僕はどう答えたら良いんだろうか。

「ワ、ワタシキミシマコーイチジャナーイげふうっ！」

どてつぱらに強烈な一撃を叩き込まれました。外人じゃごまかせなかったか！

「君島くん。覚えておきなさい。嘘は死への階段よ」

「なにその残酷な常識！ 生まれてくる世界間違えた！」

今後一生嘘をつけなくなりそうだった。

「それで、君島くんはこんなところで何をしているのかしら」

「な、何って、普通に昼ごはんを食べていたんですけど……」

「そう。お昼を取っていたのね。それはおめでとう」

全く祝福されていないのは丸分かりだった。僕が一体何をしていたというんだ。竜胆先輩の危険が悪い原因を頭の中で探してみたが、それらしき事は見当たらなかった。

「翔悟くん。僕、何か悪い事したっけ」

「昼飯に竜胆先輩のぱんつでも食ったんじゃないの」

「そんなことしないよ！ ぱんつは食べないって前に言ったじゃないか！」

確かに、一生に一度くらいはぱんつをもぐもぐしてみたい。でもそれは、その行為が社会的に許されるユートピアが出来上がるか、ぱんつをもぐもぐさせてくれる誰かが僕の前に現れたその時にしか出来ない。悔しいが、世界とはそういうものだ。

「で、何を食べたの？」

依然として威圧的な態度は変わらないまま、一見して普通の話題を振ってくる。しかし、彼女が纏うオーラには「君島くんがご飯を食べるだなんて身の程を知らなさ過ぎて思わず残飯と間違えて処理してしまいそうだわ」とでも言いたげなニュアンスを感じる。

「た、卵焼きご飯です」

「卵かけご飯？」

「いいえ、卵焼きごはんです」

なんですかその「うわぁ」って顔は。別に僕だって好きで卵焼き

ご飯を食べているわけじゃない。節約のためだ。

「はあ……まあ良いわ。君島くん、あなた、私のサポーターだったこと、自覚ある？」

「勿論ありますよ。雑務でしたらなんなりと頼んでください」

胸のバッチが、嫌でもそれを自覚させる。

「覚えていないようね……良いわ。場所を変えましょう。付いてきなさい」

言つと、先輩は身を翻して僕を待たずに出て行ってしまった。このまま放置すると後が怖いので、急いで弁当をバッグに仕舞い、先輩の後を追いかける。

一体何だつて言うんだ。全く身に覚えが無い先輩の態度に困惑しつつも追つていくと、そのまま校舎を出て裏庭のほうまで連れて行かれた。入学してからあまり利用したことが無かったが、昼食時には結構な人だかりが出来ていた。外で弁当を食べたい人のための重要なスペースらしい。青い芝生が一面に生い茂っている。中央の大きな広葉樹の前で、先輩は足を止めた。周りには数名の生徒が和気藹々としながら昼食を取っていたが、先輩の登場に少なからず驚いているのか、皆箸を止めてこちらを盗み見していた。視線が痛い。

「ここで良いわね」

竜胆先輩はバッグから青いレジャーシートを取り出し、おもむろに芝生に敷いた。はて、ここで人体実験でもやるつもりなのだろうか。いや待て、そうだとしたら被研体は僕じゃないかこの場合。逃げるか？ いやそれこそ止めよう。物理的に殺されかねない。

先輩は靴を脱いで丁寧にスカートと膝の上で畳むと、綺麗な正座でレジャーシートの上に座り、僕を見上げてきた。

「どうしたの。座りなさいよ」

「は、はい」

僕は言われたとおり、慎重にレジャーシートに座った。どうやらレジャーシートに罨は無いようだ。しかし、ここで油断してはならない。あのバッグの中から脇差が出てきて「これで切腹しなさい」

とか言われるかもしれない。ヤバイ。本格的に自分で何を言っているのか分からなくなってきた。混乱しすぎだろ僕。素直にしていればいいんだ。命くらいは助かるかもしれない。

予想通り、先輩は自分のバッグに手を掛けた。脇差か、日本刀か、物干し竿か。ダメだダメだ。ネガティブに考えるな。自分の都合の良いほうへ妄想しろ。ぱんつ、そう、ぱんつがいい。先輩が今日はくぱんつがどれか選べなくて、僕に相談したということにしよう。いや待てよ、それじゃあ先輩は今ぱんつをはいていないということにならないか。それはまずい。日本の女子たるもの、ノーパンで街を闊歩し、学園生活を謳歌していたなどということはあつてはならない。だが、そこまでして自分のぱんつに悩んでしまうという乙女の姿もまた良いものがある。そんな悩みを抱えた彼女に対して、僕はノーパンであることを責めることが出来るだろうか。否、出来ない。迷える子羊を導くのも僕の役目だと思えばそれも許せよう。さあ先輩、どんなぱんつで悩んでいたんですか。僕に見せて御覧なさい。

「はい、お弁当」

出てきたのは重箱だった。しかも五段構え。間違つてもぱんつが出てくるなどとは思っていなかったが、お弁当という予想外なものに加え、この量。驚かずにはいられない。中がすつかすかで「てめえに弁当なんて作ってくるわけねえだろバーカ!」とか言われたら泣く。リアルに泣く。

「こ、これは?」

「昨日、一緒に昼食取るって、あなたが言っただんじやない」

「はて、そんなこと言いました超言いました三回くらい言いました」
重箱が凶器になる姿は見なくなかった。きちんと思い返してみれば、確かにそんなことを言っただような気がする。あの時は同じぼちを見つけた喜びで錯乱していた節があるけど。

「ほ、本当に忘れていたみたいね。最低だわ。朝早くから準備した私が馬鹿みたいじゃない」

「えっ、僕のためにそこまで……」

少し申し訳ない気持ちになる。一時のノリであんなことを言ってしまった自分を呪いたい。

「あなたのためじゃないわよ！　なんで私がそんなことしなきゃならないの！」

「じゃあどうして僕の分まで。そこまでして貰わなくても……」

「そ、それは……」

振り上げたままだった重箱を下ろし、急に先輩がしおらしくなる。なんだか内股気味で頬まで染めてしまっている。と、トイレだろうか。気を遣ったほうがいいのかな？

「だ、誰かとお弁当を食べるの久しぶりだから、気合が入っちゃっただけよ……」

「……」

本格的にぼっちだった。

「先輩、重箱開けていいですか？　どんなお弁当か気になります」
世界の全てが先輩の敵に回っても、僕だけは彼女の味方になってやろうと、中二病っぽく妄想の中でキメた。

「そう？　じゃあ、一番下から……」

一段目をご開帳すると、真っ白な平原が広がっていた。なるほど、太陽に輝くその姿は始まりの地とも言うべきか。何をその上に建てるにしても、整った土地がなければ何も始まらない。つまりはそういう意味を包含した白米地獄か。梅干すら無かった。

「二段目は……」

マグマ。つまり、先ほどの白米地獄から数えて、八大地獄がこれから展開されていくのだろうか。大焦熱地獄。浮いているジャガイモらしきものは地獄に飲み込まれた犠牲者たちの残骸か。カレーだ。二段目はカレーで埋め尽くされていた。洗うの大変そう。

「もしものために……」

極寒の地。マグマで焼き尽くされた肉体をいたぶるように、続く地獄は極寒地獄。ほのかに香る甘い匂いは食欲を駆り立てはするが、

それこそが罠。マグマで耐え抜いたものをついに死の淵へ追いやる追撃。カレーに続いてシチューとは。具が入ってなかった。

「ちよつと失敗したんだけど……」

炭。苦しみに耐えかねたものを自害させるための練炭か何か。一種の優しさすら感じる。それとも、冷めたカレーとシチューを温めなおすために持ってきたものだろうか。なるほど、重箱にそれを詰めてくるとは、先輩も気が利く人だ。ところどころに食材だった頃の残滓が見えるのは幻覚だろう。

「最後にこれっ」

とても、とても美しい弁当だった。左上からクリームコロッケ、スパゲッティ、から揚げ、ミックスベジタブル、ソーセージらしき形の炭、そして炭が入っていた。多分冷凍食品だと思います。後ろ二つはよく分かりません。

「これは……バリエーション豊かですね。とても前衛的です」

「カレーにしようと思ったのだけれど、君島くんの口に合うか分からなかったからシチューも入れてみたのよ。我ながら完璧な発想だと思っただわ」

「それで重箱をチョイスしたんですか」

「そうよ。普通のお弁当箱だと入り切らないもの」

確かに、誰かと食べるために用意された弁当だった。ただし、もはやパーティ用クラスだが。四段目はどこに敷けば良いんですか？と聞こうとして止めた。怖いからじゃない。火を起こすものが無いからだ。仕方ない。彼女のミスを責めるつもりは無いんだ。炭に着火するためのライターを忘れるなんて、お茶目なところがあるもんだなっということにしておこう。

「オススメは、これとこれを混ぜて……」

「ちよ——！」

竜胆先輩は、突然カレーの容器にシチューを流し込み始めた。

「先輩落ち着いてください！ そんなことをしてもビックバンは起きませんよ！」

「な、何を言っているの？」

「新世界を創造したい気持ちは痛いほど分かりますが、そんなことをしても誰も幸せになんかなりません！ 考え直してください！」

僕は身の危機を感じて先輩からシチューを奪い取り、一気に喉に流し込んだ。固形が一切入っていない分飲みやすかったが、それが逆に悲しかった。

「凄く美味しいです先輩。まるでまろやかな牛乳みたいな味がします。ほんの少し酸味が利いているのは隠し味ですか？ 流石ですね」

「あ、分かるの？ 牛乳はほんの少し発酵させたほうが良いって聞いたのよ」

「なるほど。凄いことを言う人がいるもんですね」

トイレよ、僕を待て。

「カレーはどんな感じですか？ どれどれ、もぐもぐ、ふむ、これもまた竜胆先輩テイストですね。楽しい味がします。まるでカーニバルにいるようだ」

カレー味のアレかなこれ。それともアレ味のカレーかな。

「ちょ、ちよっと。私の分を残さないよ」

「すいません。あまりにも凄い味で一気に食べてしまいました。今度パンか何か奢りますから、それで許してくれませんか？」

「し、仕方ないわね。そこまで言うなら」

僕は誓ったんだ。世界が敵に回っても、僕は先輩の味方でいると吐きそうです。

謎の満腹感を得た僕は、レジャーシートの上に寝転がった。青い空は僕を天へ誘っているようで、伸ばしても届かない手を、僕はいつまでも空に掲げていた。あの雲に乗って、世界のどこかへ旅に出かけたい。どこか、ぱんつの見える場所へ……。

「君島くん。これはどうかしら？」

竜胆先輩が青空を遮るように箸を持ってきた。その先には、炭が挟まれていた。

はて、どうかしら、というのはどういう意味だろうか。どこかの

特産品の炭で、それを僕に自慢したいのだろうか。しかし、いかにせん僕は炭には詳しくない。どう、と聞かれても困ってしまうのが現状だ。

そうして僕が答えに窮していると、

「食べてみてくれないかしら」

「はあ？」

思わず、素になって聞き返してしまった。いや、僕の気持ちも理解して頂きたい。例えば友達間でキャンプをしていたとしよう。そこで飯ごうを行い、カレーを作った。わいわいと食事をし、ようやく皆満足して片付けようとしていた最中、「おい君島、お前炭食えよ」とか言われているのだ。虐め以外の何物でもない。幾ら竜胆先輩がサドっ気に溢れた人物だとしても、今の言葉には人格を疑いかねない。

「何よその反応。随分と嫌そうじゃない」

むっとした表情で先輩がそう言った。もう僕には何が何だかわからない。もしかして、万が一の確率で、あの箸の先に挟まっているものが、炭ではないと、そう先輩は言いたいのか。カレーやシチューを温めるものではないと、そう言うのか？

「先輩。失礼を承知で聞きますが、それは何ですか？」

「タコさんウィンナー」

メタモルフオーゼを終えたタコらしかった。

「先輩、何か幻覚に囚われているようなので僕が真実を伝えます。

それはウィンナーでもタコでもありません。炭です」

「――」

バキィツ、と炭が破砕する。レジャーシートの上に散らばった死骸が、食材の悲しみの涙にしか見えなかった。この世に生まれてきてくれてありがとう。君の悲しみは、先輩の暴力と共に僕がしっかりと受け止めるよ。願わくば、来世は可愛いぱんつをはいた女の子になることを、僕は望んでいる。

「――ふうっ」

てつきり新技が飛んでくると思つて身構えていた僕だったが、竜胆先輩は溜めていた何かを吐き出すように息を吐くと、黙つて粉々になった炭を重箱の中に戻し始めた。

「せ、先輩？」

「悪かつたわ。正直に言つて、私は現実逃避をしていた。自分の作つたものが全て炭化していくのを、私は見ていられなかった。まさか、ここまで料理の腕が無いとは思わなかったのよ。安心して、流石に自分でこれが炭だつてことくらい分かるわ」

「そ、そうですか。分かつてもらえて良かったです」

でも、分かつていて僕に食べさせようとしていたつてことになりませんかそれ。本格的に僕を殺そうとしているのだろうか。プロレス技だけじゃ物足りず、食べ物にまで手を出し始めた。敵は強大だった。

「とりあえず、食べられるものだけ食べてしましましょう」

言つて、竜胆先輩は炭を四段目にすべて除けて、五段目の冷凍食品と一段目のご飯をレジヤースートの上に広げた。伏目がちで、ぽつん、と佇むようなさびしい声。端に除けられた四段目。竜胆先輩が朝早くから準備したという手作りのお弁当。これを、本当に「炭」などと呼んで良かったのだろうか。

言つなれば、ぱんつ。

初めての彼氏とのデートの日、今日は何かあるかもしれない気合を入れて選んだ勝負ぱんつ。慣れないお洒落もこなし、その日のデートはとても良い雰囲気だった。しかし、なんとも無い一言が相手を傷つけ、結果的に険悪なムードのまま帰りの電車を迎えてしまふ。その帰り道、涙で頬を濡らしたのは何も彼女だけではない。そう、はかれたぱんつも同様に涙を流すのだ。

僕は、そんな彼女を見たくなかった。今ならまだ間に合う。一言謝れば、もしかしたら関係は修復出来るかも知れない。手遅れになる前に、僕は邪魔者が淘汰されるように除けられた重箱を手に取り、一気に掻きこんだ。

「ちょ、ちよつと！ 何してるの！」

竜胆先輩が僕を止めようと掴みかかってきたが、その時には全て腹の中に収め終わっていた。口内に残る炭の臭みが漏れないように必死に口を閉じ、なるべく嚙まないように胃袋にぶち込んだ。

「——っは。先輩、正直に申し上げて良いでしょうか」

嚙下する度に訪れる、痛み、吐き気、後悔。後悔。後悔。止めときゃよかった。信条とプライドのために特攻した僕をあざ笑うかのように炭が僕の胃袋の中で暴れ回った。

ぱんつの神よ、今だけ僕をお許し下さい。

「とても、とても不味かったです」

「……どうして」

「先輩。ぱんつ道は一朝一夕にして成らず、という言葉を知っていますか」

「知らないわよっ。ていうか、早く吐き出しなさい。病気になるわよ！」

「もう胃袋の中なのでどうにも出来ません。あのですね、僕とまだまだ未熟者です。失敗する事は何度もあります。それを呪いたくなったり、そのせいで気分が落ち込むこともあります。でも、何よりも辛いのはそれが咎められない事です。人は成長する生き物。僕が日々ぱんつを学び、失敗を犯し、そして成長するように、竜胆先輩もそうなっていただきたいと僕は思いました。だから言わせてください。これは、とても食べたもんじゃない」

爪楊枝が欲しい。歯の隙間に挟まった炭が、喋るたびに舌に刺さって痛い。

「君島くん……。私——」

「本当に、とても食べたもんじゃない。不味いったらありやしない。一体何を作ろうとしていたんですか。存外料理がヘタクソなんですね先輩」

「今すぐあなたを殺したい」

あれ、一瞬僕の言うことに陶醉したかのようなか弱い声が聞こえ

たような気がしたんだが、とても狂気に満ち溢れた一言に変わっているぞ。

瞬間。竜胆先輩の右腕が軽いスナップを利かせて上空へ。そのま
ま物凄いスピードで僕の頭の上に。脳天唐竹割り。ガードする余裕
も無く、僕はただ目を閉じて衝撃に備え……。

ぽすつ、と頭の上に手刀が乗った。片目を開いて伺うと、竜胆先
輩はいつもの冷え切った表情で言った。

「次は上手く作るわ」

「そ、そうですか」

「ただし、そこまで言ったのだから次回もあなたが食べるのよ。ど
んなにヘタクソになってもね」

「……上手くなったら食べさせてください」

「どうかしらね。自分じゃ味の判断がつかないもの」

竜胆先輩はクリームコロツケを口に運んで、「美味しい」と顔を
綻ばせた。

それから少しして。

「見てないわ」

今朝見てきた掲示板の話題を振ると、竜胆先輩はあっけらかんと
した顔でそう答えた。弁当を食べ終えたらしく、重箱を風呂敷に包
んでバッグに戻している。

「み、見てないって、良いんですか？」

「良いも何も、結果が見え透いているものをわざわざ確認しなくて
も良いでしょう」

「そういうもんですか……」

「……一応聞いておくわ。何票差だった？」

言うべきか迷ったが、結局僕はそれを口にすることにする。

「約六七〇票差、ですかね。流石神山先輩だと思いましたよ」

「全校生徒の六割以上、ね。別に驚きはしないけど。そして私はそ

の分だと、相当低かったみたいね」

「はい……」

頷くしかない。嘘のつきようがないのだから。掲示板で見た映像を思い出すたびに、やりきれない気持ちになる。

「仕方の無い事だわ。それが今の自分の評価だと受け止めるほかないのだから、いちいち落ち込んでもらえない。そんなことより、これからどうするべきかを考えるべきだわ」

「何か策はあるんですか？」

「三等生への宣伝がまだ残ってる。そこで少し挽回を図らなければならぬわね」

「宣伝、ですか……」

正直思わしくない策だった。何せ僕のクラスに来たときの事を思い出すと、到底イメージアップに繋がる方法とは思えない。竜胆先輩が心を入れ替えて優しく接する事を覚えてくれるならば良いが、まあ無理な話だろう。そもそも永結凍土の女豹という二つ名は上等生のほうが認識が大きいものだ。今更優しさの片鱗を見せたところで、選挙に対して媚びているようにしか取られないだろう。出来れば他の策を投じたいが、生憎と僕の発想力では新しく提案も出来そうになかった。

「一応、原稿があるわ。読む？」

「是非」

竜胆先輩はバッグから一枚のレポート用紙を取り出し、僕に差し出した。

それにざっと目を通す。別段おかしいところはない。少し堅苦しいが、審判員選挙に臨む姿勢や目的などが分かりやすく書かれており、むしろ好感が持てるほうだ。一番下まで読み終わると、最後の一文に「どうぞよろしくおねがいします」と書かれているのを見つけた。

「先輩、これはいつ作ったものですか？」

「選挙が始まった当日からよ。二週間前くらいかしら」

二週間前というと、僕のクラスに来た時よりも随分と前の話だ。つまり、竜胆先輩はこの原稿を覚えた上で、僕のクラスへ宣伝に来たということになる。

記憶を探ってみる。男子生徒に注意。女子生徒に注意。政治家真っ青な命令口調にパワーボム。ふむ、この文章と合致するところが何一つ無い。

全然読めてなかった。

「縦読みすると……これは財宝の在り処ですか！」

「君島くん。それは横方向に読むものよ」

「普通に返された！　ちきしょう、意地でも暗号を見つけてやる」

「君島くん。それはただの宣伝原稿よ」

「知ってますよ！　悪かったですな現実逃避して！」

翔悟くんなら乗ってくれるのに……いや、冷静に考えて僕が空気を読めてなかったか。竜胆先輩に要求するものではなかった。

「これ、読めてませんよね」

「仕方ないでしょ。あなたたちが悪いのよ。私をイラつかせるから」

「我慢してくださいよ！　選挙でしょこれ！」

パワーボムはともかく、何をどうしたらこの原稿から「投票しなさい」なんて言葉が飛び出てくるんだ。

「無理よ。私、そういうの許せない性質なの」

「先輩、気持ちは分かりますが、これは選挙ですよ。そのくらい我慢しないと本当に票が集まりませんよ」

「それは……分かってるわよ」

少しは反省しているのか、表情に影を落とした。自覚はあるらしい。何か説教の一つでも垂れてやろうかと思ったが、意外にもしおらしくなった先輩に対して何も言えなくなった。

とは言え、だ。

このまま何もせずに宣伝日を迎えたところで、前回の二の舞になること間違いなしだろう。気持ちだけでは何も出来ない。やはり、行動に移さねば。

「はあ……分かりました。僕が協力しましょう」

「協力、って言っても、どうするのよ」

「練習ですよ。先輩は全力で原稿を読み上げることだけに専念してください。僕は先輩の目の前で話を聞いている役、と言っても、先輩が我慢出来ないような失礼な態度を取りながら聞いてますから」

「つまり、私が我慢をしろと、そういうことね？」

「そうです。あと、出来るだけ愛想は良い感じで。……っと、いや、最初は無感情でも良いですから、とにかく原稿通りに読み上げてく
ださい」

「分かったわ」

さて、どうしたものか。失礼な態度と言えはまず、人の話を聞かずに何かに没頭していることだろうか。僕のクラスでも弁当を食べ
ていて注意された生徒がいたことを思い出す。あんな感じに、先輩
の目の前で何かに没頭すればいい。

「私は、二等生の竜胆あかりです——」
始まった。

僕は二本の棒針と毛糸を取り出し、途中まで編んでいた毛糸のぱ
んつを編み始めた。初めての挑戦だが、これが中々難しい。ネット
で調べてちまちまと進めているが、今年のクリスマスには間に合い
そうにない。しかし、作るものが作るものなので母親に聞くわけに
もいかない。独学で始めるには難易度の高い作り物だ。

えっと、ここはどうするんだっけ。やばい、編み図を持って来て
いないから全く分からない。あつ、なんだか良く分からない絡まり
方をしたぞ。どうやって直すんだこれ。

「ああっ、僕のぱんつが！ 初めてのぱんつがっ！」

多少なりとも形になっていた編み物が、一気にアフロみたぐち
やごちやに丸まっていく。なんて無残な姿。僕の力が足りなかった
ばかりに、また一つのぱんつが誕生を先延ばしにされてしまった。
こんな、こんなことって……！

「——厳密化を図り……」

「ごめん、ごめんよ。僕が身の程を弁えていたなら、君はこんなことには……。無力だ、僕はなんて無力なんだっ。ぱんつ一つも作れないようで、何がぱんつラヴァーだ。くそっ、くそっ！」

「——よって、私が今回審判員になって成し遂げたいことは……」

「ああ、慈悲深きぱんつの神よ。僕を許したまへ……この、罪深き僕を——」

「断罪してあげるわ」

真剣が振り下ろされたかのような一閃が目の前に走った。二本の棒針は何故か四本になり、アフロは真つ二つになった。足元を見ると、先輩の踵が芝生にめり込んでいた。え、踵落とし？　ぱんつ見えなかったよ？

「君島くんのこととは私が覚えておいてあげる。だから……安心して逝って」

「感動の最終回みたいなことと言ってごまかさないでください！」

「パンツのことはお断りするわ。焼いて捨てれば？」

「なんてことを！」

ぱんつが焼かれるくらいなら僕が火の中に飛び込むわ！

「……先輩、我慢してくださいって言ったじゃないですか。どんな相手がいても動じない心を手に入れないと、宣伝は厳しいですよ」

「君島くん。あなたの言うことは正しいけど、教室で毛系のパンツを編んでいる生徒なんてどうやってもいないわ。そんな生徒がいたら抹殺する権利を与えられてもおかしくないと思うのだけど」

「先輩、安易に抹殺なんて言葉を使うから威圧的になるんです。もっと柔らかい言い方は無いんですか？」

「ぶち殺す権利を与えられてもおかしくないと思うのだけれど」

「生々しい表現になりましたね！」

「成るほど、中々優しい感じになったかもしれないわね」

「どこが!？」

「言葉一つでこんなにイメージが変わるのね。勉強になるわ」

「間違った方向に学習してませんか」

「さつきから文句ばかりね。じゃあ何ならいいのよ。言ってみなさい」

「えっ、うーん。そう言われると……ぶ、プチ殺すとか？」

「やべっ。明らかに滑った。」

「成るほど。右腕一本くらいで済ませるといことね。頭良いわね君島くん」

「そんな！　今は冷たい目で見て欲しかった！」

「え……M、なの？」

「そんな冷たい目で見ないで！」

「恥ずかしいっ、でも感じちゃう！　意味分らない。」

と、こんなことをしている場合じゃない。目の前で編み物をしている生徒も許せないようでは、道の先は暗い。しかし、先輩の言うとおりかなり特異な状況であったことも否めないだろう。ここはもう少し一般的に行くべきか。

「先輩、もう一度やりましょう」

「今度ふざけたらあなたが単細胞生物のように分裂するけど構わないわよね？」

「前後からぱんつを同時に眺められると思えば嘘です何でもありません」

首元に手が伸びてきたので即行で撤回した。

先輩が原稿を手に読み上げようとしたのと同時に、僕は慣れないヤンキー座りをして言った。

「おいネーチャン、ちよつとぱんつ見せてみいや」

「ふんっ！」

「ぶげらっ！」

つま先が頼にめり込み、首が変な方向に折れ曲がって視界が揺れたかと思うと、中央の芝生エリアからご退場を促され、アスファルトに肩とか足とか色んな部分を強打した拳句、振り上げた足によつて捲れ上がったスカートの中身を見ることがすらも叶わなかった。

「先輩！　我慢してくださいよ！」

「今のを我慢しろっていうのはおかしいわ。プチ殺す権利が私にはあったわ」

「プチじゃ済まされませんよ!？」

「頭蓋骨の一つくらい砕けても問題ないでしょう」

「先輩は人体構造を小学生から勉強し直すべきだ!」

「何を言ってるの？ 理科だろうが科学だろうが、毎回百点だったわ」

「道徳とか倫理の時間に何か疎外感を覚えたことはありませんか」

「ど、どうしてそれを……!？」

その素の表情で返すのは新しい先輩を見れたという喜びと同時に恐怖を覚えます。

「私が道徳の時間に手を上げるたびに教室がどうしてか静まり返ったわ。今まで理由は分からなかったのだけど、そう、人間の人体構造を理解出来ていなかったからなのね」

「話の脈絡的に僕が間違ったことは認めますが、その理解の仕方はおかしいです」

「左胸辺りを刺せば心臓に当たると思っていたのだけど、やっぱり少し中央付近なのね。だから私が左胸を刺せば人は死にますって言ったらみんな凍りついたわけか。私の回答が間違っていたから」

「どんな授業の時にその発言をしたんですか!？」

人の死に方なんて授業でやらなかったよ僕は!

「……とにかく、心を仏のようにして俗世から意識を切り離すんです。原稿を読めばいいんです、ただそれだけのことじゃないですか」

「そうは言っけどね君島くん。あなただって自分の目の前で嫌っていることをされたら我慢なんて出来ないでしょう。例えば、えっと、し、下着をぞんざいに扱われてたりしたら」

「我慢出来るわけじゃないですか」

「……即答ね」

「最近ぱんつを被って変態ぶってるクソガキが出没してましてね、もしも僕が見つけてしまったら命を取りかねない……」

アニメなんかでぱんつを頭に被っている主人公を見るたびに殺意が沸く。あれは帽子なんかじゃないし、それを被ることによって自分の変態性を強調しようとしているのが苛立たしい。穿けよ！ 穿いて精神を同調しろよ！

目の前から冷ややかな視線を感じたので現実に戻ってくると、竜胆先輩がドン引きしていた。でも構いはしない、いいじゃない男の子だもの。

「しかし、そう考えると確かに先輩に無理をさせるのは難しい気がしてきました」

「さらっと流したわね」

「気にしていたら身が持ちませんから」

「変に悟ってる……」

「とりあえず、我慢はするだけして、あとは僕がなんとかサポートしてみます。肉壁くらいにはなるでしょう」

「どういうことよ、それ？」

不思議そうな顔をして先輩が聞いた。

「先輩の暴力は僕が食い止めます」

「なっ、べ、別に殴らないわよ！ やたら滅多ら殴るのは君島くんくらいだわ！」

「それはそれでなんか理不尽だ！」

「その、勘違いしないでね。君島くんを特別視してるわけじゃないの。ただなんというか、殴り心地が良くて……」

「酷くないですか！？」

「う、嘘はついてないわよ！」

「嘘であって下さいよ！？ なんですか殴り心地が良いって。僕は低反発サンドバッグか何かですか！」

「……………それだわ」

「！？」

突っ込む言葉すら失せた。いや発声はした。何か良く分からない絶望の欠片らしき言葉は出た。先輩にサンドバッグとしか思われて

いなかったということに対する悲しみと、蹴られる時にぱんつが見えるんじゃないかという期待と、そう思ってしまう自分への誇りが入り混じって「!？」という一語に落ち着いた。

「君島くん。とにかく宣伝の日は頼むわね。私何を言うか分からないから」

「!？」

「……何よ。何も言っていないじゃない」

「!？」

「殴るわよ」

「すいません」

妙にはまりそうだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9817p/>

彼女のパンツはかく語りき

2011年7月18日03時15分発行